

北野廃寺・北野遺跡

2019年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

北野廃寺・北野遺跡

2019年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、関西アーバン銀行北野支店新築工事に伴う北野廃寺・北野遺跡の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

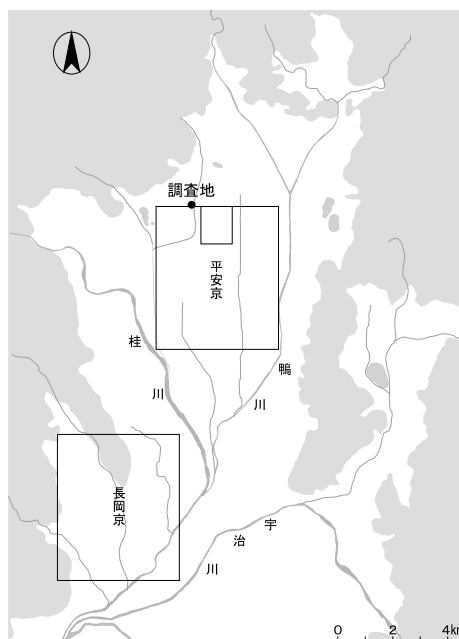
末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました多くの関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

平成31年3月

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 井 上 満 郎

例 言

- 1 遺 跡 名 北野廃寺・北野遺跡（京都市番号 18 S 429）
- 2 調査所在地 京都市北区北野下白梅町56番地
- 3 委 託 者 株式会社 関西アーバン銀行 代表取締役 橋本和正
- 4 調査期間 2018年9月25日～2018年11月7日
- 5 調査面積 約195㎡
- 6 調査担当者 岡田麻衣子・近藤章子
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「衣笠山」・「花園」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構番号 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
- 12 遺物番号 通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 13 本書作成 岡田麻衣子
- 14 備 考 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、調査業務職員及び資料業務職員があたった。
- 15 協力者 調査・整理にあたり、平尾政幸氏からご教示頂いた。記して感謝を申し上げます。



(調査地点図)

目 次

1. 調査経過	1
2. 位置と環境	3
(1) 調査地と環境	3
(2) 主要な既往調査	5
3. 遺 構	11
(1) 基本層序	11
(2) 遺構の概要	12
(3) 第1面の遺構	12
(4) 第2面の遺構	14
4. 遺 物	16
(1) 遺物の概要	16
(2) 土器類・金属製品	16
(3) 瓦類	19
5. ま と め	23
(1) 北野廃寺の寺域構成	23
(2) 北野廃寺と平安京との間	26
(3) 結語	26

図 版 目 次

図版1	遺構	第1面平面図（1：120）
図版2	遺構	第2面平面図（1：120）
図版3	遺構	調査区北壁・西壁断面図（1：80）
図版4	遺構	調査区西半（1区）第1面全景（北西から） 調査区東半（2区）第1面全景（北西から）
図版5	遺構	調査区西半（1区）第2面全景（東から） 調査区東半（2区）第2面全景（北西から）
図版6	遺構	1 溝10完掘状況（東から） 2 土坑40 瓦出土状況（東南東から） 3 柱穴45 瓦出土状況（北西から） 4 埋納遺構53 遺物出土状況（北から）

図版7 遺物 土器類・金属製品

図版8 遺物 瓦類1

図版9 遺物 瓦類2

図版10 遺物 瓦類3

挿 図 目 次

図1	調査位置図（1：5,000）	1
図2	調査前全景（南西から）	2
図3	作業風景1（南西から）	2
図4	作業風景2（南東から）	2
図5	調査区配置図（1：500）	2
図6	主要な既往調査位置図（1：3,000）	5
図7	基本層序図（1：30）	11
図8	柵1実測図（1：50）	12
図9	柱穴6・17・52実測図（1：30）	13
図10	溝10断面図（1：30）	13
図11	柱穴45実測図（1：30）	14
図12	埋納遺構53実測図（1：10）	14
図13	土坑61断面図（1：40）	15
図14	溝10出土土器実測図（1：4）	16
図15	整地土出土土器実測図（1：4）	17
図16	土坑55・60・61出土土器実測図（1：4）	18
図17	埋納遺構53出土遺物実測図（1：4）	18
図18	金属製品実測図（1：4）	18
図19	金属製品X線写真（1：2）	19
図20	出土瓦類拓影及び実測図1（1：4、1：6）	20
図21	出土瓦類拓影及び実測図2（1：6）	22
図22	飛鳥時代から平安時代の遺構分布図（1：2,000）	24
図23	北野廃寺断面柱状図（1：50）	25
図24	一条大路北大溝断面柱状図（1：50）	26

表 目 次

表 1	主要な既往調査一覧表	6
表 2	遺構概要表	11
表 3	遺物概要表	16

付 表 目 次

付表 1	掲載土器類一覧表	28
付表 2	掲載金属製品一覧表	29
付表 3	掲載軒瓦一覧表	29
付表 4	掲載丸瓦・平瓦・その他の瓦一覧表	29

北野廃寺・北野遺跡

1. 調査経過

今回の調査は、京都市北区北野下白梅町56番地で実施した、関西アーバン銀行北野支店新築工事に伴う発掘調査である。工事に先立ち、試掘調査が京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下、「文化財保護課」とする）によって実施され、平安時代の遺構・遺物が確認された。この結果を受け、文化財保護課は、関西アーバン銀行に対して発掘調査の指導を行い、委託を受けた公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所が発掘調査を実施することとなった。

調査地は、北野廃寺推定寺域内の南東部および弥生時代から室町時代の複合遺跡である北野遺跡の南側に該当する¹⁾（図1）。これまで周辺の調査では、古墳時代の竪穴建物、飛鳥時代から平安

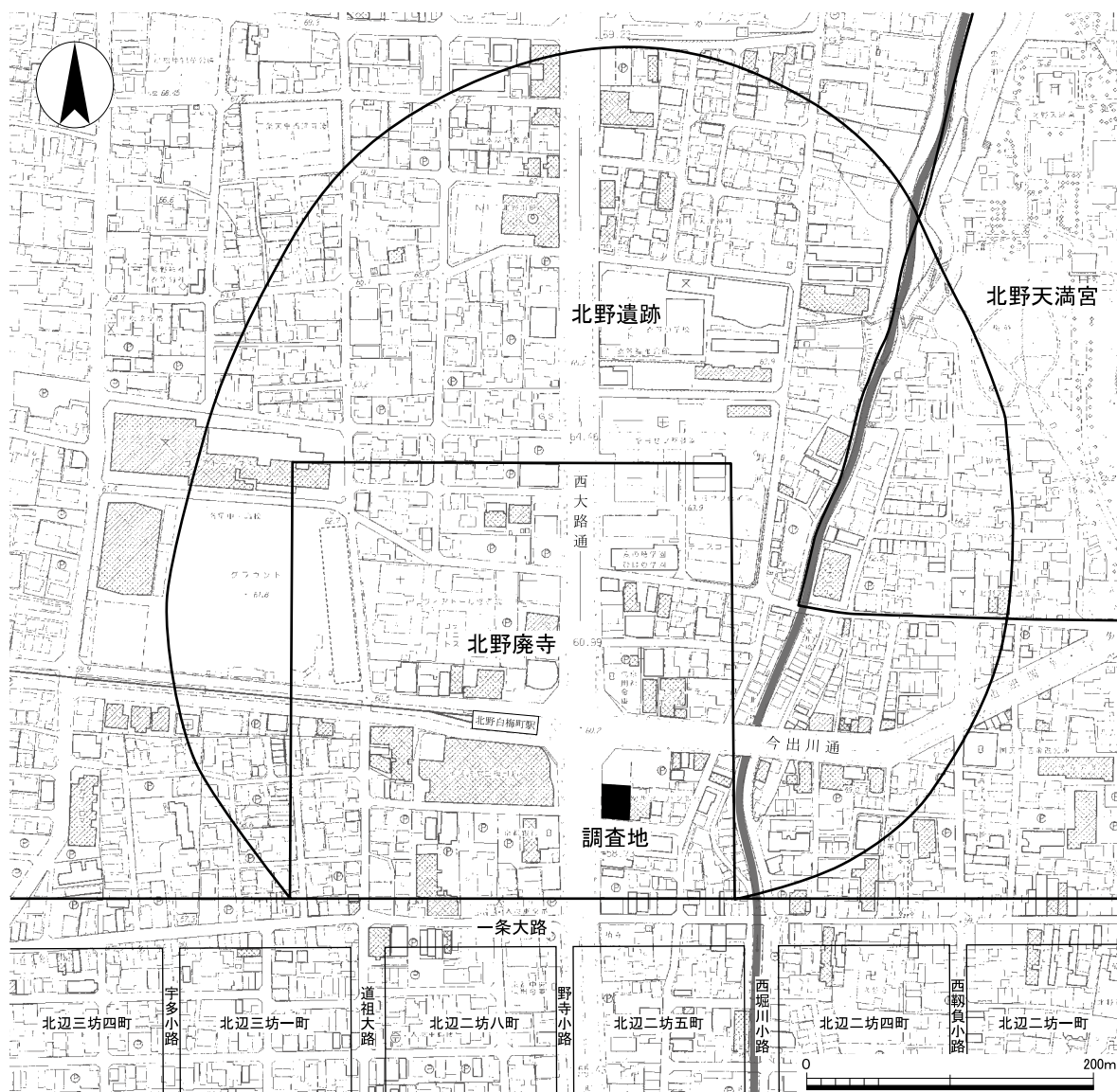


図1 調査位置図（1：5,000）



図2 調査前全景（南西から）



図3 作業風景1（南西から）



図4 作業風景2（南東から）

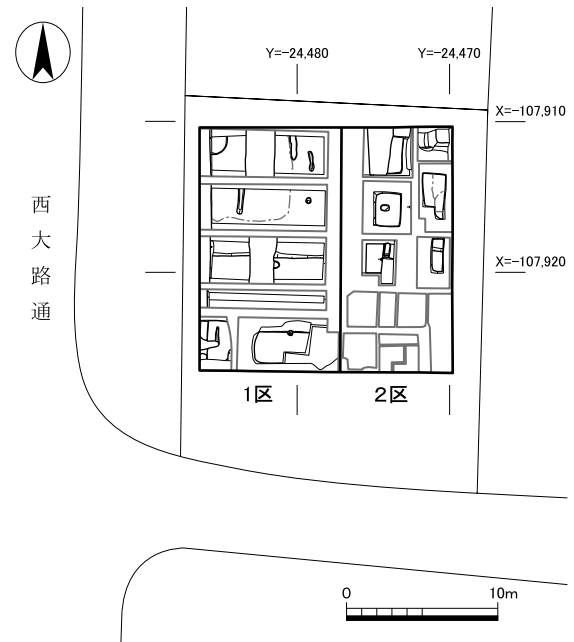


図5 調査区配置図（1：500）

時代の講堂跡と推定されている基壇、築地、瓦を供給していた瓦窯跡、礎石建物など北野廃寺に関連する遺構や遺物が検出されている。今回の調査においても弥生時代から室町時代の遺構・遺物の検出が予想された。

調査は2018年9月25日より開始した。調査区は、南北16m、東西16.4mの262.4㎡を文化財保護課より指導を受け、設定した(図5)。ただし、建物基礎などによって実際の調査面積は約195㎡である。残土置き場の関係から調査区を東西2つに分け、西半を1区、東半を2区として設定し、1区から2区へ反転して調査を進めた。調査地の全体に格子状のコンクリート建物基礎が残されており、遺構面は島状に残存している状態であった。特に調査地の南東側は、建物基礎によって地山面まで削平されていた。各遺構面において図面作成や写真撮影などの記録作業を行い、適宜、文化財保護課による指導を受けた。

今回の調査では、平安時代中期初頭の柱穴・埋納遺構・土取り土坑、平安時代中期の整地土・東西溝・柵・柱穴・土坑、中世の耕作溝などを検出した。11月7日に全ての調査を終了した。

2. 位置と環境

(1) 調査地と環境

調査地は京都盆地北西部に位置し、北には衣笠山や大文字山、東には紙屋川（天神川）が流れている。現在は、南北に通る西大路通、東西に通る今出川通に加えて、京福電鉄（嵐電）の北野白梅町駅があることから京都市内北西部の交通の要所となっている。

調査地である北野一带は、古墳時代に葛野県、律令制下に山城国葛野郡の一部であった。調査地以西の嵯峨野は、渡来氏族である秦氏と密接な関係があった地域である。特に古墳時代後期から飛鳥時代の遺跡の増加が発掘調査などからわかっており、当時秦氏が大きな勢力を持っていたことがうかがえる。北野も嵯峨野からの影響を受けている可能性が考えられるため、両地域を比較することは京都の歴史を解明する上で重要である。北野・嵯峨野両地域を対比させつつ、概観する。

北野地域での先史時代・縄文時代の遺構や遺物の発見例は大変少ない。先史時代遺物の主な発見例は、市電撤去の際に確認された有舌尖頭器や1978年立会の際に確認された尖頭器である。縄文時代遺物の主な発見例は、1977年調査の石鏃などが挙げられる。弥生時代の遺跡としては、北野廃寺の調査で北野遺跡が発見され、集落の存在が明らかとなる。集落遺跡である北野遺跡は、弥生時代から室町時代まで続いていく。平安時代になると、平安京造営に伴い調査地の南側は、右京北西域として京内に取り込まれる。調査地の東部に流れる紙屋川（天神川）もこの頃付け替えが行われ、西堀川として京内に取り込まれている。

一方嵯峨野地域では、北野地域よりもやや多く、先史時代から弥生時代の集落遺跡が確認されている。古墳時代以降になると、畿内各地では前方後円墳が衰退していくが、嵯峨野地域では太秦の低位段丘上に前方後円墳が次々に築造されていき、常盤仲之町遺跡などの集落遺跡も確認されるようになる。そして、7世紀前半を境に古墳の築造や集落遺跡などは激減する。当時嵯峨野地域に生活を営んでいた人々として、『日本書紀』などの文献史料から渡来系の氏族である秦氏が挙げられる。秦氏は、農耕・機織・金工・木工など優れた手工業を持っており、地域活性化に貢献していく。そして飛鳥時代になると、人々の信仰の場である神社や寺なども築造していく。その中で秦氏が創建に関わったとして有名な寺に、京都市右京区太秦蜂岡町に所在する広隆寺がある。この広隆寺の前身寺院は、『日本書紀』に秦河勝が建立したと記述されている「蜂岡寺」に相当すると考えられている。この蜂岡寺は、当時よりこの地にあったのではなく、現在の北区に所在する平野神社付近から現在の地へ移ってきたとされる。このことから昭和11年（1936年）に発見された北野廃寺は、発見位置や時代がほぼ同じであること、発掘調査で平安時代の土器ではあるが「鶺鴒室」・「秦立」と墨書された土器が出土していることや文献史料の記述から、広隆寺と同様に秦氏が創建に関わったと考えられる。

北野廃寺が発見された経緯は、昭和11年（1936年）、電車の敷設工事に伴い、古瓦が大量に出土したことによる。その際出土した瓦が飛鳥時代のものであったことから、京都市内最古の寺院の存

在が明らかとなり、発見者の一人である藤澤一夫氏によって地名から「北野廃寺」と命名された。この北野廃寺が『日本書紀』推古天皇31年条にみえる「葛野秦寺」に相当すると考えられている。また、同様に秦氏建立の寺院とされる広隆寺（蜂岡寺）の成立に関しては諸説が存在するが、葛野秦寺は出土瓦などから蜂岡寺とは別寺院であり、平安京造営に際して葛野秦寺の寺籍が蜂岡寺へ移され、広隆寺として統合されたという説が近年有力視されている。さらに葛野秦寺は移転後、その地には官寺である「常住寺（野寺）」が営まれ、奈良の七官大寺と同様に重要な寺として新たな歴史が始まったとされる。ただ、この常住寺の成立に伴って、その前身施設をどの程度利用したのかは不明である。そして、文献史料にみえる常住寺に関する記述は、室町時代中期の『拾芥抄』下巻の記述が最後であり、廃絶された経緯は不明である。

参考文献

- 網 伸也「広隆寺創建問題に関する考古学的私見」『古代探叢IV－滝口宏先生追悼考古学論集－』滝口宏先生追悼考古学論集編集委員会・早稲田大学所沢校地蔵文化財研究室 1995年 pp.477-496
- 同上 「平安京と東西寺・常住寺」『都城制研究（8） 古代寺院と寺社』奈良女子大学古代学術センター 2014年 pp.87-99
- 林 南壽『廣隆寺史の研究』中央公論美術出版 2003年
- 上村和直「広隆寺－移建か山背最古の寺－」『古代寺院の移建と再建を考える』帝塚山考古学研究所 1995年 pp.110-126
- 臈谷 寿『史料 京都の歴史6 北区』平凡社 1993年
- 加納敬二・小檜山一良・平田 泰『京都嵯峨野の遺跡－広域立会調査による遺跡調査報告－』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1997年
- 喜田貞吉「山城北部の條里を調査して太秦廣隆寺の舊地に及ぶ（上）・（下）」『歴史地理』第25巻1・2号 日本歴史地理学会 1983年 pp.11-23、pp.173-182
- 浪貝 毅「北野廃寺と広隆寺旧境内（京都市）」『佛教藝術』第116巻 毎日新聞社 1977年 pp.18-24
- 堀 大輔「北野廃寺」「廣隆寺」『飛鳥白鳳の薨～京都市の古代寺院～』京都市文化財ブックス第24集 京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課 2010年 pp.2-14
- 坂東善平「野寺跡の一知見」『古代学研究』第39巻 古代学研究会 1964年 pp.23-26
- 福山敏夫「山城国葛野郡の條里について」『歴史地理』第71巻4号 日本歴史地理学会 1938年 pp.60-66
- 同上 「野寺の位置について」『史迹と美術』第87号 史迹美術同友会 1983年 pp.1-7
- 藤澤一夫「山城北野廃寺」『考古学』第9巻-2号 東京考古学会 1936年 pp.47-80

(2) 主要な既往調査（図6、表1）

北野廃寺の発見は、先述したように昭和11年（1936年）、電車の敷設工事に伴う古瓦の出土が契機である（調査1）。それ以降、様々な研究機関によって数多くの調査が行われてきた。調査5では、「鶴室」と墨書された灰釉陶器段皿が出土しており、北野廃寺の実態を解明する上で重要かつ貴重な資料である。調査2・6・23・29では、講堂跡と思われる遺構が検出されており、この付近が北野廃寺の伽藍中枢部と考えられる。また、元慶8年（884）と天慶3年（940）に起ったとされる火災痕（2時期の焼土面）が確認されている。調査10では、寺域の東限と考えられる飛鳥時代から奈良時代の南北溝が検出されており、調査15・13・5へと続いている。また、土取り土坑からは、「野寺」と墨書された土師器も出土している。今回の調査地の西側にあたる調査11では、北野廃寺に瓦を供給していた飛鳥時代と平安時代の窯跡が検出されている。調査17・25では、寺域の北限と考えられる溝が検出され、調査15では「野」と墨書された土師器が出土している。調査21・

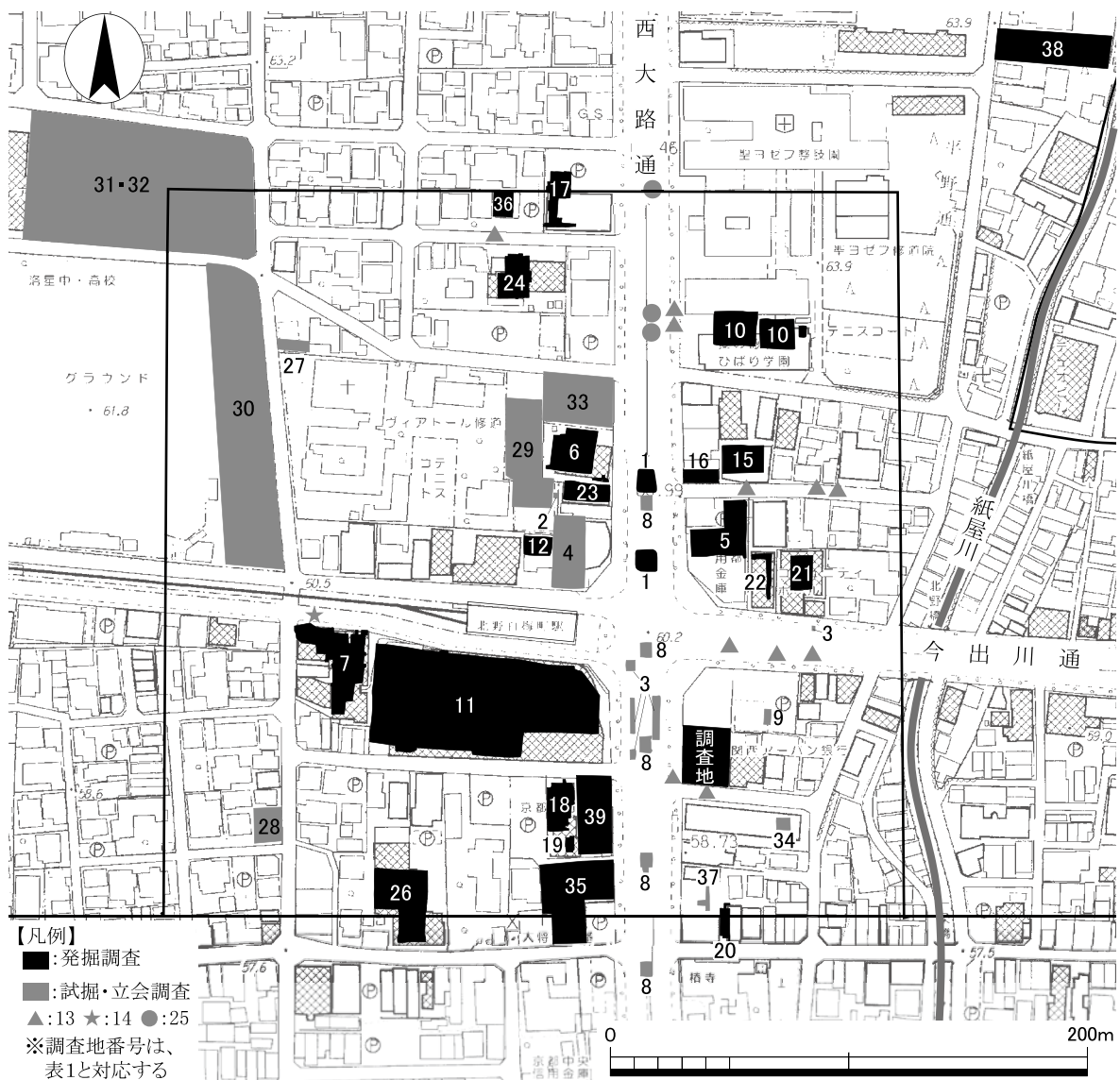


図6 主要な既往調査位置図（1：3,000）

表1 主要な既往調査一覧表

調査位置	調査方法	調査期間	調査機関	調査面積 (㎡)	主な遺構	主な遺物	文献 番号
1 ※2	試掘	1936/07/27 ～1936/09	京都府史蹟 調査会	約90?	遺物包含層、基壇または築地状遺構。	飛鳥～平安の瓦、土師器、須恵器、陶磁器類。室町の香炉。	1・2
2 ※2	立会	1965/7/1	京都府教育委員会 文化財保護課	—	飛鳥～奈良の瓦積基壇。	—	3
3 ※2	発掘・立会	1975/06/02 ～1975/06/30	六勝寺研究会	—	飛鳥～平安の溝状遺構、基壇状遺構、ピット。	飛鳥～平安の瓦、土師器、須恵器、緑釉。	3
4 ※2	発掘・立会	1975/07/29 ～1975/08/27	六勝寺研究会	—	平安前～後期の石列溝、ピット。	平安前～後期の瓦、土師器、須恵器、緑釉。	4
5 ※2	発掘	1977/03/07 ～1977/06/04	京都市埋文研	約400	古墳の堅穴建物。平安以前の溝、建物。平安の溝。鎌倉の遺物包含層。室町の溝、建物、柵。	飛鳥～平安の軒丸瓦、軒平瓦、緑釉、灰釉「鶺鴒」、土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、釘。鎌倉の土師器。	5・6
6	発掘	1977/12/19 ～1978/02/20	京都市埋文研	約360	奈良～平安の講堂跡(焼けた痕跡)。室町の建物、土坑。	石器。飛鳥～平安の瓦、土器。室町の土器。	7・8
7 ※2	発掘	1978/09/01 ～1978/10/28	京都市埋文研	約500	弥生の堅穴建物。飛鳥の堅穴建物、掘立柱建物。平安の建物、溝。中世の溝。	平安中期の土師器「鶺鴒」、須恵器、緑釉、灰釉、金銅金具。	9・10
8 ※2	立会	1978/10/25 ～1978/11/30	京都市埋文研	—	中世の溝、土坑。江戸の河川。	飛鳥～奈良の瓦。	11
9 ※2	試掘	1979/05/26 ～1979/05/31	京都市埋文研	20	平安のピット、土採り土坑、南北溝。	瓦、土師器、須恵器、瓦器、緑釉。	12
10 ※2	発掘	1979/06/06 ～1979/07/31	京都市埋文研	約500	飛鳥の溝、土採り土坑。平安の溝(寺城東限)、土坑、建物。中世の建物、溝、土坑、柵。	瓦、土師器「野寺」、須恵器。	13・14
11 ※2	発掘	1979/10/23 ～1980/04/16	京都市埋文研	約3600	弥生の堅穴建物。奈良の窯。平安の掘立柱建物、溝、土坑。室町の建物、柵、井戸。	弥生土器。奈良～平安の瓦、土師器、須恵器、仏頭。	15
12	発掘	1980/04/23 ～1980/05/05	京都市埋文研	約80	平安～室町のピット、土坑。	平安～室町の瓦、土師器、染付。	16
13 ※3	立会	1981/06/08 ～1982/03/19	京都市埋文研	—	古墳の溝?、堅穴建物。飛鳥～平安の溝、土坑。室町の溝、土坑、柱穴、井戸。江戸の土坑、井戸。	古墳～江戸の瓦、土師器、須恵器、墨書土器「野寺」、緑釉、瓦器、キリシタン墓碑。	17
14 ※3	立会	1981/10/10 ～1982/08/20	京都市埋文研	—	平安の溝(一条大路北側溝、馬代小路東・西側溝・道祖大路西側溝含む)、井戸、土坑。	飛鳥～平安の瓦、土師器、須恵器、緑釉、灰釉。	18
15	発掘	1983/01/25 ～1983/03/08	京都市埋文研	158	7世紀の南北溝。平安の建物。	7世紀の瓦、土師器、須恵器。平安の土師器、須恵器、緑釉、硯、釘、鉄滓。	19・20
16	立会・発掘	1985/12/19 ～1985/12/20	京都市埋文研	—	平安の土坑状遺構。	平安の瓦、土師器、須恵器、緑釉、灰釉「秦立」「佛所」、黒色土器、青磁、白磁、製塩土器、埴、金属製品。	21
17	発掘	1986/05/08 ～1986/05/31	京都市埋文研	173	飛鳥の堅穴建物。奈良の溝。平安の建物、土坑。鎌倉～江戸のピット。	飛鳥～平安の瓦、土師器、須恵器、墨書土器「野」。鎌倉～江戸の土師器。	22・23
18	発掘	1986/06/02 ～1986/06/30	京都市埋文研	206	飛鳥～奈良の自然流路、土坑。平安の土壇、瓦溜、整地層。室町の柱穴、溝、土坑。	飛鳥～奈良の瓦、土師器、須恵器、緑釉、灰釉。室町の土師器。	24・25
19	試掘	1987/03/10 ～1987/03/11	京都市埋文研	—	奈良～平安の土壇状遺構、流路。	平安の瓦、土師器、須恵器、緑釉、灰釉。	26
20	発掘	1987/04/21 ～1987/05/09	京都市埋文研	55.4	古墳の流路。平安の溝、土坑、柱穴、整地、敷石状遺構。鎌倉の溝、柱列。土坑、室町の柱列。	古墳の土師器。平安の瓦、土師器、須恵器、黒色土器、緑釉、灰釉、白磁、土馬。鎌倉～室町の土師器。	27・28
21	発掘	1987/04/27 ～1987/06/06	京都市埋文研	137	平安の土壇、溝、土坑。室町の柱穴。	飛鳥～平安の瓦、土師器、須恵器、緑釉、灰釉、二彩。	29

調査位置	調査方法	調査期間	調査機関	調査面積 (㎡)	主な遺構	主な遺物	文献 番号
22	発掘	1988/07/21 ～1988/08/05	京都市埋文研	56.3	平安の溝、土坑、柱穴、流路。	平安の瓦、土師器、須恵器、黒色土器、二彩、鉄塊。	30
23	発掘	1990/02/14 ～1990/03/03	京都市埋文研	約90	奈良～平安の土坑、基壇版築。	飛鳥～平安の瓦、土師器、須恵器。	31・32
24	発掘	1996/10/16 ～1996/11/23	京都市埋文研	220	奈良の堅穴建物、掘立柱建物、溝、平安の掘立柱建物、カマド、土坑。室町の建物、土坑。	奈良～平安の瓦、土師器、須恵器、緑釉、灰釉、製塩土器。室町の磁器。	33・34
25 ※3	立会	1993/06/24 ～1994/02/02	京都市埋文研	833.1	飛鳥～平安の回廊の版築、溝、瓦溜。	飛鳥～平安の瓦、土師器、須恵器、墨書土器。	35
26	発掘	1997/03/07 ～1997/05/23	京都市埋文研	563	平安の一条大路北側溝、井戸、土坑、整地層。室町の土坑。江戸の整地層、溝。	弥生土器。奈良～平安の瓦、土師器、須恵器、黒色土器、緑釉、灰釉。室町～江戸の陶磁器類。	36
27	立会	1997/04/11 ～1997/04/21	京都市埋文研	—	平安の基壇状高まり、土坑。中世の整地層。	—	37
28	立会	1997/05/09 ～1997/05/16	京都市埋文研	60	平安の溝、土坑、路面、ピット。中世の溝。	平安～中世の瓦類、土器類。	38
29	試掘	1999/8/5	京都市文化財保護課	—	奈良～平安の基壇建物、掘立柱建物、回廊部分、柱穴。中世の整地層。	—	39
30	試掘	2000/03/08 ～2000/03/09	京都市文化財保護課	—	平安の石列(基壇状遺構)、溝、土坑、自然流路、焼土。	—	40
31	試掘	2001/02/21 ～2001/02/22	京都市文化財保護課	—	平安～中世の自然流路、溝。	平安～中世の瓦、土師器、須恵器、天目茶碗。	41
32	試掘	2001/3/28	京都市文化財保護課	22	時期不明の土坑。近世の溝。	—	42
33	立会・試掘	2002/11/1	京都市文化財保護課	—	古代の土坑、整地層。中世の整地層。	古代の瓦。	43
34	試掘	2005/8/17	京都市文化財保護課	39	時期不明の紙屋川氾濫の影響。	—	44
35	発掘	2009/09/18 ～2009/10/25	関西文化財調査会	481	平安の一条大路北側溝。中世の土坑、溝。江戸の井戸、土坑。	奈良～平安の瓦、土師器、須恵器、緑釉、灰釉。中世の土師器、瓦器、陶磁器。江戸の伊万里。	45
36	発掘	2010/10/12 ～2010/11/09	京都市埋文研	93.5	飛鳥～奈良の溝(寺城北限)、土坑。平安の建物、柱穴。室町の土坑、門遺構、掘。	石器。平安の瓦、土師器、須恵器、緑釉、灰釉。室町の土師器、輸入陶磁器、釘。	46
37	試掘	2012/04/20 ・2012/05/14	京都市文化財保護課	—	平安の溝(寺城南限)、土坑、流路。	—	47
38	発掘	2013/10/08 ～2013/10/22	古代文化調査会	112	鎌倉～明治の土坑、柱穴。	鎌倉～明治の土師器、須恵器、陶磁器(キリスト教関連)。	48
39	発掘	2017/02/15 ～2017/03/31	京都市埋文研	181	平安の土採り土坑、井戸、建物、柵。中世の溝。	飛鳥～平安の瓦、土師器、須恵器、黒色土器、緑釉、灰釉、鉄釘、銭貨。江戸の瓦、銭貨。	49
今回の調査地	発掘	2018/09/25 ～2018/11/09	京都市埋文研	約195	平安の溝、土採り土坑、整地層、柱穴、ピット。	弥生土器。平安の瓦、土師器、須恵器、黒色土器、緑釉、灰釉、鉄	本報告書 製品。

※1 調査・試掘・立会は多数にわたっており、今回は、遺構が検出されているものだけに提示する。

※2 正確な調査位置(座標数値)が明らかではないため、調査区配置図より作成。

※3 調査位置(座標数値)は、未報告資料より作成。

※4 京都市埋文研：財団法人・公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所

3・13では、調査10・15・5などで検出された溝とは別の寺域の東限と考えられる平安時代の溝が検出されている。調査26・35では、一条大路北側溝と土取り土坑が確認されている。この一条大路北側溝は、幅約12mと規模が大きく、その機能が注目される。調査35へと続く。調査38では、北野廃寺に関する遺構は検出されず、北野廃寺の寺域はここまで広がらないことが確認された。調査39では、本調査と同様に平安時代中期の調査地ほぼ全体に広がる平安時代中期の土取り土坑が確認されている。

文献（表1 既往調査一覧表）

- 1 藤澤一夫「山城北野廃寺」『考古学』第9巻-2号 東京考古学会 1936年
- 2 時野谷 勝「北野廃寺址」『京都府史跡史蹟名勝天然記念物調査報告 第18巻』 京都府教育委員会 1938年 pp.75 - 88
- 3 畑 美樹徳・木村捷三郎『北野廃寺発掘調査報告』 六勝寺研究会 1978年
- 4 畑 美樹徳・山口 博『北野廃寺発掘調査報告』 六勝寺研究会 1978年
- 5 堀内明博『北野廃寺 発掘調査報告書』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第7冊 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1987年
- 6 「13 北野廃寺」『昭和51年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2008年 p.24
- 7 梅川光隆『北野廃寺 ハイツねむの木建設に伴う発掘調査の概要 昭和52年度』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1982年
- 8 「42 北野廃寺」『昭和52年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2011年 pp.116 - 118
- 9 梅川光隆『北野廃寺跡 シャルマンハイツ白梅町 新築に伴う発掘調査の概要 昭和53年度』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1982年
- 10 梅川光隆「68 北野廃寺1」『昭和53年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2011年 pp.165 - 170
- 11 「69 北野廃寺2」『昭和53年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2011年 pp.171 - 172
- 12 「第2章 試掘・立会調査」『昭和54年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2012年 p.197 +未報告資料
- 13 梅川光隆『北野廃寺跡 文化庁国庫補助事業による発掘調査の概要 1979年度』 京都市文化観光局・財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1980年
- 14 「70 北野廃寺1」『昭和54年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2012年 pp.153 - 156
- 15 「71 北野廃寺2」『昭和54年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2012年 pp.157 - 173
- 16 「73 北野廃寺」『昭和55年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2011年 p.118
- 17 家崎孝治「4 北野廃寺、北野遺跡」『昭和56年度 京都市埋蔵文化財調査概要（試掘・立会調査編）』

- 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1983年 pp.38 - 41
- 18 家崎孝治「5 右京北辺二・三・四坊、一条二・三・四坊と北野廃寺、北野遺跡」『昭和56年度 京都市埋蔵文化財調査概要（試掘・立会調査編）』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1983年 pp.10 - 13
 - 19 堀内明博・前田義明『北野廃寺発掘調査概報 昭和57年度』京都市文化観光局 1984年
 - 20 堀内明博・前田義明「48 北野廃寺」『昭和57年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1984年 pp.94 - 95
 - 21 「VI 北野廃寺（RH36）」『昭和62年度 京都市内遺跡試掘立会調査概報』京都市文化市民局 1986年 pp.25 - 29
 - 22 鈴木久男・吉崎 伸「I 第10次発掘調査」『北野廃寺発掘調査概報 昭和61年度』京都市文化市観光局 1987年 pp.1 - 7
 - 23 鈴木久男・吉崎 伸「29 北野廃寺1」『昭和61年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1989年 pp.84 - 85
 - 24 本 弥八郎・木下保明「II 第11次発掘調査」『北野廃寺発掘調査概報 昭和61年度』京都市文化観光局 1987年 pp.8 - 16
 - 25 本 弥八郎・木下保明「30 北野廃寺2」『昭和61年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1989年 pp.86 - 87
 - 26 「VI 北野廃寺跡（61年度RH10）」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和62年度』京都市内文化観光局 1987年 pp.31 - 37
 - 27 堀内明博「平安京右京北辺二坊」『平安京跡発掘調査概報 昭和62年度』京都市文化観光局 1988年 pp.1 - 15
 - 28 堀内明博「平安京右京北辺二坊」『昭和62年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1991年 p.41
 - 29 木下保明「44 北野廃寺」『昭和62年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1991年 pp.110 - 112
 - 30 久世康博「45 北野廃寺」『昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1993年 pp.115 - 116
 - 31 菅田 薫「I 北野廃寺」『北野廃寺・北白川廃寺発掘調査概報』京都市文化観光局 1990年
 - 32 菅田 薫「45 北野廃寺」『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1994年 p.123
 - 33 網 伸也・南 孝雄「II 北野廃寺跡第15次調査」『京都市内遺跡発掘調査概報 平成8年度』京都市文化市民局 1997年 pp.12 - 24
 - 34 網 伸也「18 北野廃寺」『平成8年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1998年 p.68
 - 35 「7 北野廃寺」『平成5年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1996年 pp.108 - 109 + 未報告資料
 - 36 平尾政幸「11 平安京右京北辺二坊・北野廃寺」『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1999年 pp.86 - 89
 - 37 竜子正彦「2 北野遺跡・北野廃寺1（97RH23）」『京都市内遺跡立会調査概報 平成9年度』京都市

- 文化市民局 1997年 pp.30 - 31
- 38 小檜山一良「Ⅲ 北野遺跡・北野廃寺2 (97RH65)」『京都市内遺跡立会調査概報 平成9年度』京都市文化市民局 1997年 pp.32 - 37
- 39 馬瀬智光「Ⅵ 北野廃寺 No.52」『京都市内遺跡試掘調査概報 平成11年度』京都市文化市民局 2000年 pp.15 - 17・36
- 40 堀 大輔「Ⅶ 北野廃寺 No.16」『京都市内遺跡試掘調査概報 平成12年度』京都市文化市民局 2001年 pp.20 - 24・34
- 41 堀 大輔「Ⅴ-3 北野廃寺・北野遺跡 No.14」『京都市内遺跡試掘調査概報 平成13年度』京都市文化市民局 2002年 pp.35 - 38
- 42 『京都市内遺跡試掘調査概報 平成14年度』京都市文化市民局 2003年 p.37 ※一覽表のみ
- 43 堀 大輔「Ⅴ-2 北野廃寺・北野遺跡 No.54」『京都市内遺跡試掘調査概報 平成14年度』京都市文化市民局 2003年 pp.35 - 38
- 44 『京都市内遺跡試掘調査報告 平成17年度』京都市文化市民局 2006年 p.38 ※一覽表のみ
- 45 吉川義彦・鈴木久史『北野廃寺発掘調査報告書』関西文化財調査会 2010年
- 46 柏田有香「Ⅷ 北野廃寺17次調査」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成22年度』京都市文化市民局 2011年 pp.134 - 156
- 47 宇野隆志「Ⅴ-3 北野廃寺・北野遺跡 No.81」『京都市内遺跡試掘調査報告 平成24年度』京都市文化市民局 2013年 pp.49 - 51・90
- 48 水谷明子『北野遺跡』古代文化調査会 2013年
- 49 中谷正和『北野廃寺・北野遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2016 - 16 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2017年

3. 遺 構

(1) 基本層序 (図7、図版3)

調査地周辺の現況地形は、北西部がやや高く南東部へ向かって緩やかに傾斜している。調査地の現地表面の標高は59.60～59.75mである。現地表下0.3～0.6mが現代盛土、その下に中世の耕作土が0.1～0.3mある(図7-1層)。その下に平安時代中期の整地土が0.1～0.35mある(図7-2層)。調査区の大部分で、平安時代中期初頭の土取り土坑を検出した。調査地東側の土取りが行われている地点では、平安時代中期の整地土の下に土取り土坑埋土が約0.7mある(図7-3～6層)。その下が黄褐色微砂の地山である(図7-10層)。また、調査区東端の土取りが行われていない地点では、平安時代中期の整地土の下に平安時代以前の地山が土壌化した層が0.2mある(図7-7・8層)。その下にはいわゆる黒ボク土(地山)が0.18m堆積している(図7-9層)。その下が黄褐色微砂の地山である(図7-10層)。

調査は、平安時代中期の整地土上面を第1面、地山上面を第2面として調査を行った。

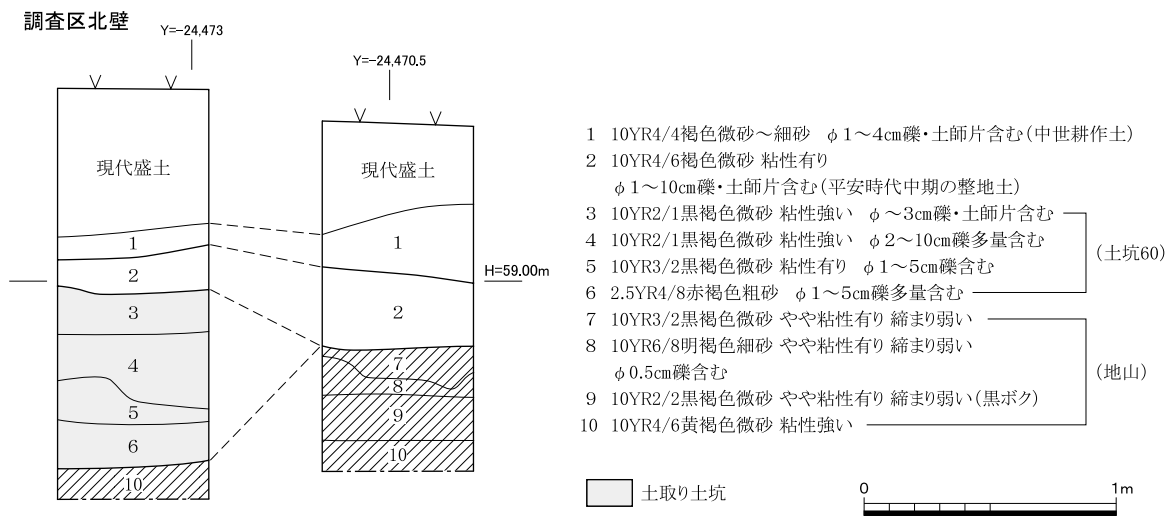


図7 基本層序図 (1:30)

表2 遺構概要表

時代	遺構	備考
平安時代中期初頭	柱穴45、埋納遺構53、土坑18・39・40・54～58・60・61	
平安時代中期	柵1、柱穴6・17・52、土坑5、溝10	
中世	溝1・2・8・12	

(2) 遺構の概要 (表2)

今回の調査では、平安時代から中世と推定される遺構を検出した。平安時代の遺構としては、平安時代中期初頭の柱穴、埋納遺構、土取り土坑²⁾や平安時代中期の柵、土坑、柱穴、溝など、中世の遺構としては、耕作溝を検出した。調査区西側は、地山である粘性の強い黄褐色土を採取した平安時代中期初頭の土取り土坑が連続している。一方、調査区東端では、同じく地山である粘性の強い黄褐色土の上にある、いわゆる黒ボク土が明瞭に残存しており、土取りは行われていないことを確認した。

以下に、検出した各時期の主要な遺構について述べる。

(3) 第1面の遺構 (図版1・4)

柵1 (図8) 調査区中央、溝10の南側に並行して検出した東西方向の柱穴列である。検出した柱穴は4基で、検出長は6.4m、柱穴の間隔は、約2~2.4mである。深さは検出面から0.2~0.48mある。柱穴は直径0.25~0.4mの円形または楕円形、埋土からは土師器皿が出土したが、小片のため、時期は不明である。ただ後述する平安時代中期の溝10と並行している状況から同時期の可能性が高い。

柱穴6 (図9) 調査区北西部で検出した平面形が楕円形の柱穴である。規模は南北約0.39m、東西約0.32m、深さは検出面から約0.2mある。地下式礎石が据えられ、その規模は、南北0.2m、東西0.18mあり、上面・底面共に平らである。埋土からは土師器小片が出土したが、小片のため、時期は不明である。

柱穴17 (図9) 調査区南西部で検出した平面形がほぼ円形の柱穴である。規模は南北約0.31m、東西約0.32m、埋土から土師器の小片が出土したが、小片のため、時期は不明である。

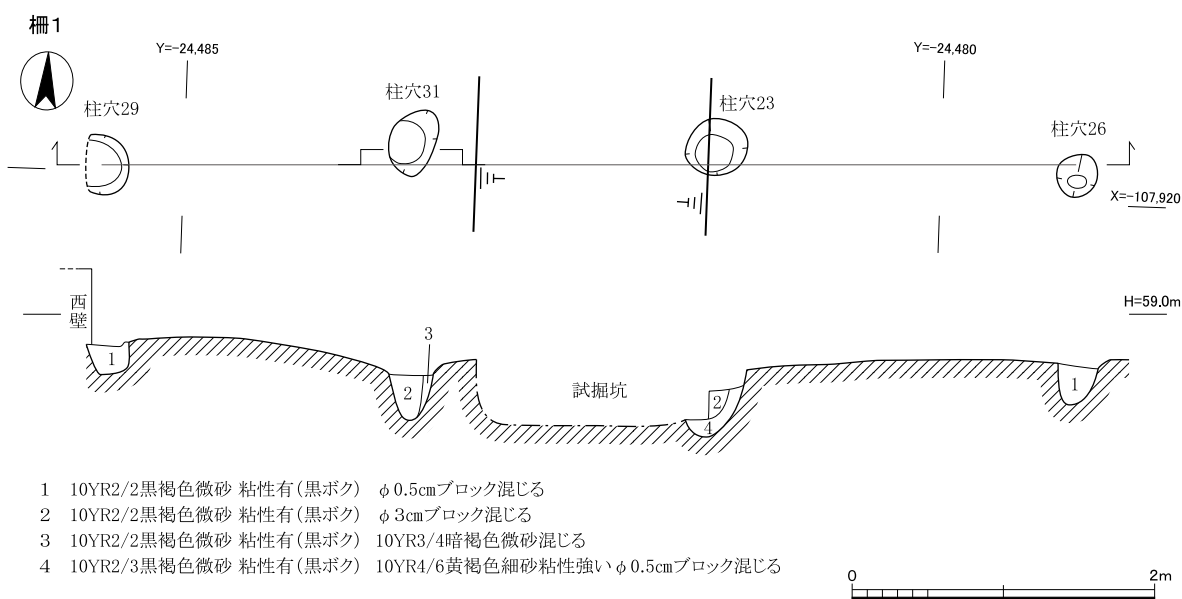


図8 柵1実測図 (1:50)

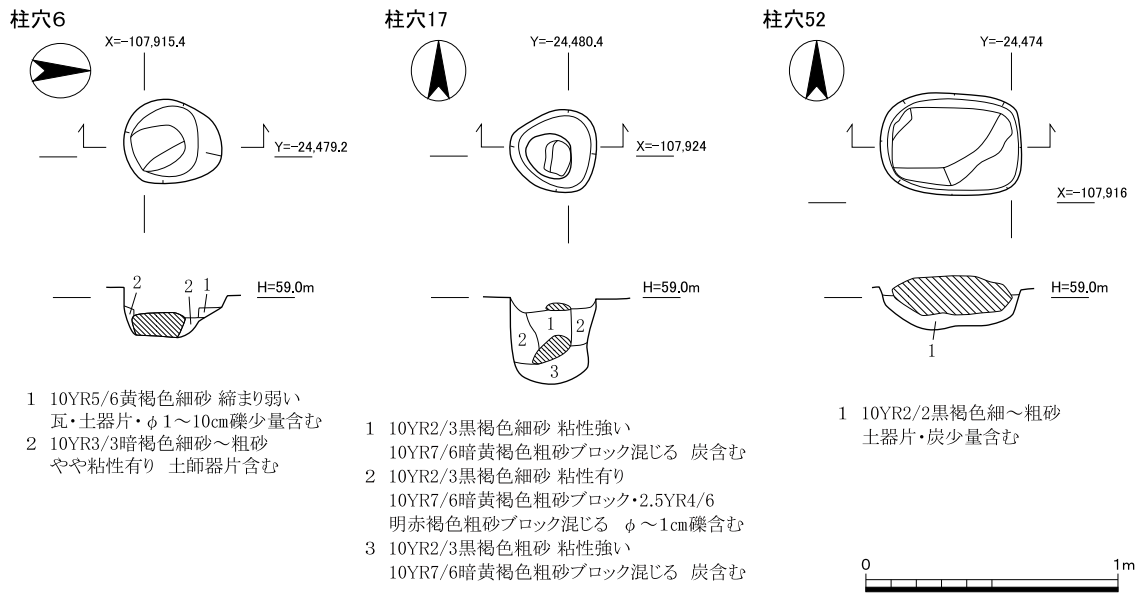


図9 柱穴6・17・52実測図(1:30)

土坑5 調査区北西隅で検出した隅丸方形の土坑である。規模は一辺約1m、深さは検出面から0.33mある。埋土から遺物コンテナ5箱の多量の瓦が出土した。整地土の上に成立している。後述する土取り土坑出土の瓦は、全て飛鳥時代・白鳳時代の瓦であるが、土坑5からは平安時代の瓦が数点出土している。

柱穴52(図9) 調査区北東部で検出した平面形が楕円形の柱穴である。規模は南北約0.4m、東西約0.53m、深さは検出面から約0.8mある。礎石と考えられる石は、南北0.3m、東西0.48mある。埋土から土師器が出土したが、小片のため、時期は不明である。

溝1・2・8・12 調査区北西部と南西部で検出した南北溝である。検出長は1.4m前後、幅は0.2~0.4m、深さは約0.15mである。溝底部の北と南で勾配差はほぼ認められない。埋土は、いずれも黄褐色微砂が混じる暗褐色細砂である。溝の規模や埋土の状況から中世耕作溝の跡だと考えられる。

溝10(図10、図版6) 調査区中央部で検出した東西方向の溝である。検出規模は幅約1.2m以上、深さは約0.35mである。調査区西端の溝底の標高は58.52m、東端の標高は58.23mで底面は東へ傾斜する。東西両端は調査区外に延長する。溝埋土から平瓦の小片と平安時代中期と考えられる土師器皿が出土した。

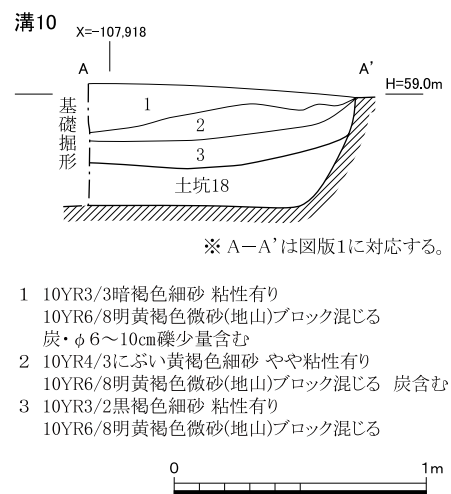


図10 溝10断面図(1:30)

(4) 第2面の遺構 (図版2・5)

柱穴45 (図11、図版6) 調査区中央部で検出した円形の柱穴である。規模は直径約0.25m、深さは約0.25mある。中央に径約0.1mの柱痕跡がのこる。埋土から飛鳥寺出土瓦とよく似た文様の軒丸瓦が出土した。

埋納遺構53 (図12、図版6) 調査区北西部の平安時代中期の整地土を掘削中に土坑61埋土直上で検出した。掘形がほとんどないことから、整地を施す過程で埋納が行われたと考えられる。土師器の皿、須恵器の壺、刀子が出土した。土師器皿は伏せた状態で出土している。

土坑18 (図版6) 調査区西中央部で検出した平面形が不整形な土取り土坑である。建物基礎によって規模を特定できないが、検出長は南北約0.8~1.8m、東西約2.4m、深さは0.4mである。埋土から土師器皿や瓦が出土したが、小片のため時期は不明である。

土坑39・40 (図版6) 調査区南西隅で検出した平面形が不整形な土取り土坑である。規模は南北約2.5m、東西約6.5m、深さは0.4~1mある。黒褐色微砂の埋土から土器類、平瓦が出土した。建物基礎によって間を遮られているが、土坑39・40共に底面に大量の瓦をまとめて廃棄していることから一連の土取り土坑であると考えられる。

土坑54 調査区北西部で検出した平面形が不整形な土取り土坑である。建物基礎によって規模を特定できないが、検出長は南北約2.5m、東西約2.7m、深さは0.4~1.6mである。底部では、東西をさらに掘り下げている。暗褐色細砂の埋土から土師器、須恵器、軒丸瓦、軒平瓦、大量の平瓦が出土した。

土坑55 調査区北部で検出した平面形が不整形な土取り土坑である。建物基礎によって規模を特定できないが、検出長は南北約2.6m、東西約3.5m、深さは0.5~1.2mある。底部では、東西をさらに掘り下げている。褐色細砂の埋土から土師器、須恵器、大量の瓦類が出土した。

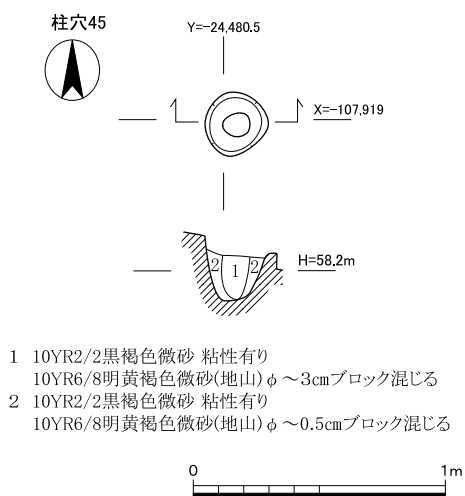


図11 柱穴45実測図 (1:30)

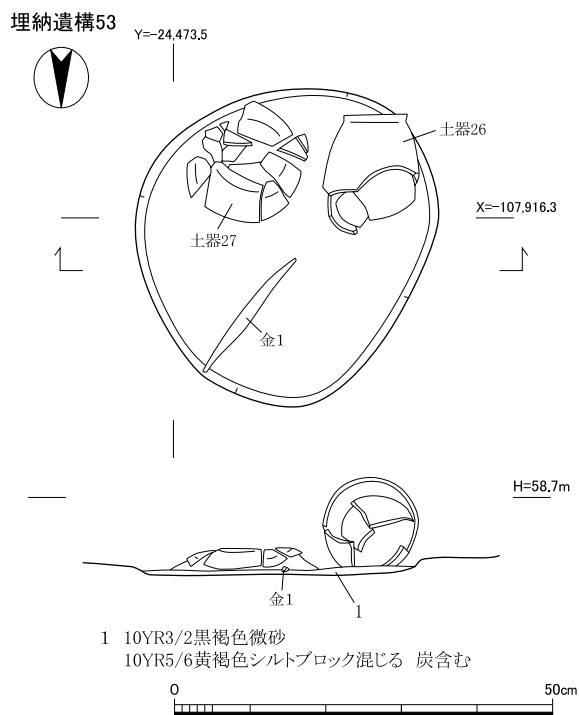


図12 埋納遺構53実測図 (1:10)

土坑56 調査区北西部で検出した平面形が隅丸方形の土取り土坑である。建物基礎によって規模を特定できないが、検出長は南北約1.3m、東西約0.9m、深さは約1mある。黒褐色微砂の埋土から土師器、須恵器、大量の瓦類が出土した。

土坑57 調査区中央部で検出した平面形が不整形な土取り土坑である。建物基礎によって規模を特定できないが、検出長は南北約2.3m、東西約2.9m、深さは0.1～0.8mである。東へさらに掘り下げている。黄褐色微砂の埋土から土師器皿や瓦が出土したが、小片のため時期は不明である。

土坑60 調査区北東部で検出した平面形が不整形な土取り土坑である。建物基礎によって規模を特定できないが、検出長は南北約2.5m、東西約0.9m、深さは最大約0.65mある。赤褐色粗砂の埋土から土師器、須恵器、大量の瓦類、金属製品が出土した。

土坑61 (図13) 調査区北西部で検出した平面形が不整形な土取り土坑である。建物基礎によって規模を特定できないが、検出長は南北約2.2m、東西約2m、深さは0.1～0.4mある。赤褐色粗砂の埋土から土師器、須恵器、大量の平瓦、金属製品が出土した。また、埋土直上である標高約58.6mの地点で埋納遺構53を検出した。

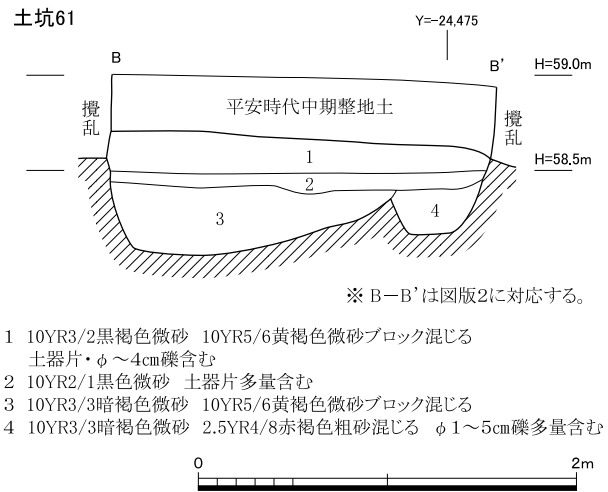


図13 土坑61断面図 (1 : 40)

4. 遺 物

(1) 遺物の概要

今回の調査では、遺物コンテナにして71箱の遺物が出土した。出土遺物には、土器・陶器・瓦類・金属製品がある。そのうち9割以上を瓦類が占める。遺物の帰属時期は、弥生時代から平安時代中期までの各時期のものがある（表3）。

以下、遺構ごとに出土した遺物の概要を述べる。なお、出土遺物の時期の判定は、平安京・京都I期～XIV期の編年案に準ずる³⁾。個別詳細については、付表1～4にまとめた。

(2) 土器類・金属製品

出土土器には、弥生土器、土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器などがある。土器類の時期は、弥生時代、飛鳥時代から奈良時代、平安時代前期、平安時代中期に大別することができ、その多くは平安時代中期のものである。

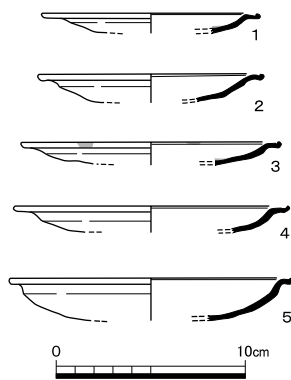


図14 溝10出土土器実測図（1：4）

溝10出土土器（図14 1～5） 1～5は土師器皿である。調整は、全て内面・口縁部をヨコナデし、口縁端部を摘み上げ、底部は指オサエしており、器壁が薄手である。いわゆる「て」の字状口縁の土師器皿であり、京都Ⅲ期古段階に属する資料である。1・3には油煙が一部付着しており、灯明皿とみられる。

整地土出土土器（図15、図版7 6～17） 6は須恵器杯身である。調整は、口縁部から体部は回転ナデ、やや外反する。底部付近はヘラおこしのち軽く押さえ、底部は丸味をお

表3 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
弥生時代	弥生土器				
飛鳥時代～奈良時代	須恵器、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦		須恵器3点、軒丸瓦5点、丸瓦4点、平瓦9点、道具瓦1点		
平安時代前期	土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、金属製品		土師器5点、須恵器10点、黒色土器1点、緑釉陶器2点、灰釉陶器1点、軒平瓦1点、金属製品4点		
平安時代中期	土師器		土師器5点		
合計		76箱	51点（4箱）	0箱	72箱

※ コンテナ箱数の合計は、Aランクの遺物を抽出等の整理をしたため、出土時より5箱多くなっている。

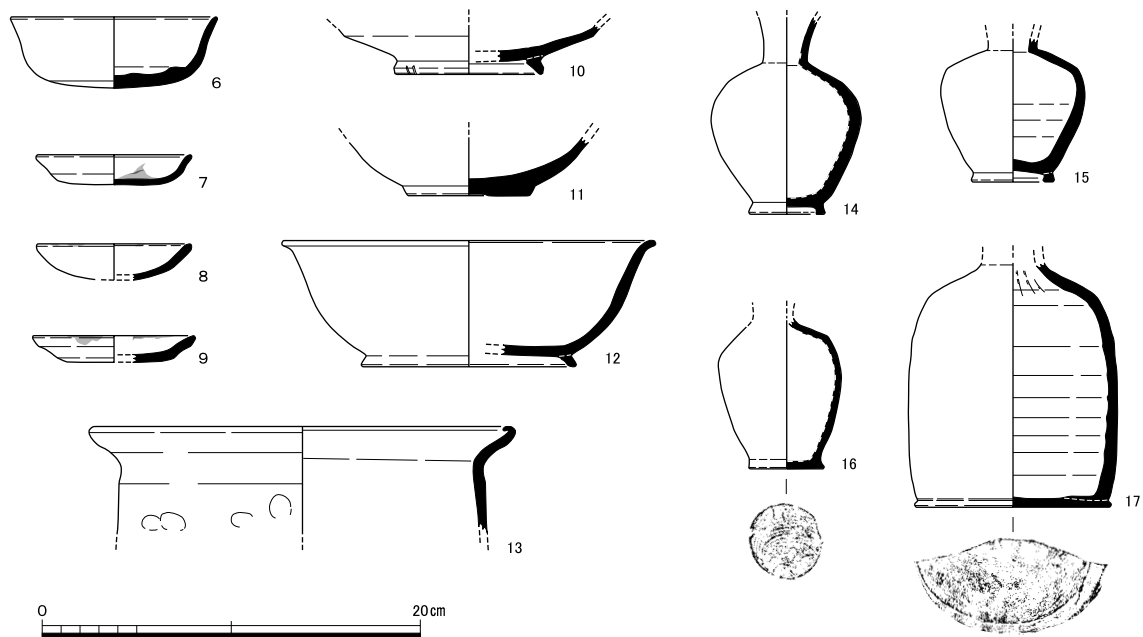


図15 整地土出土土器実測図（1：4）

びる。7～9は土師器皿である。調整は、内面・口縁部をヨコナデし、口縁端部を摘み上げ、底部は指オサエしている。8は平安京内では出土例が少ない形態である。内面・口縁部はヨコナデされ、底部は指オサエ、口縁端部・体部ともにやや丸みをおび、器壁は厚い。7～9には油煙が一部付着しており、灯明皿とみられる。10は灰釉陶器段皿である。調整は、内面はナデ、外面・底面を回転ヘラケズリ、高台を貼り付けている、高台外面に窯記号と考えられる2条のヘラ状工具による圧痕がある。猿投産であり、平安京Ⅱ期古段階に属する。11・12は緑釉陶器碗である。11の調整は、内外面共に回転ナデのちミガキがされ、高台の底部まで施釉される。高台は削り出し成形による蛇の目高台である。内面底部には、焼成時に使用したとみられるトチン痕が残る。京都産である。12の調整は、内外面共に回転ナデのちミガキがされる。口縁部はやや外反し、端部は丸味をおびる。高台は貼り付けで、高台の底部まで施釉される。内面底部には、トチン痕が残る。猿投産であり、平安京Ⅰ期新段階に属する。13は土師器甕である。調整は、内外面ともにナデ、体部を指オサエしている。口縁部はやや外反し、端部は内側に丸味を持ちながら屈曲する。14～17は須恵器壺である。14・15は、内外面を回転ナデ成形のち、頸部・輪高台を接合している。体部は倒卵形で丸味をおびる。平安京Ⅰ期に属する資料である。16は、体部は倒卵形であるが、14・15と比べ、ややスリムであり、高台には回転糸切り痕が残る。平安京Ⅱ期に属する。17は、平底の底部から体部は寸胴で、頸部に向かって狭まるが、頸部より上は欠損する。また、底部は回転ヘラ切りによる。

土坑55・60・61出土土器（図16、図版7 18～25）18は須恵器杯蓋である。土坑60から出土した。天井部外面を回転ヘラケズリ、内面・口縁部は回転ナデ。ツマミはやや筒状の宝珠形である。19は須恵器杯身である。土坑60から出土した。口縁部から体部は回転ナデ、底部外面はヘラおこしのち軽く押さえている。先述の9と比べて、口縁部は垂直に上がり、底部は平らである。20は黒色土器A類の碗である。土坑61から出土した。磨滅が著しいため、調整は不明である。口縁

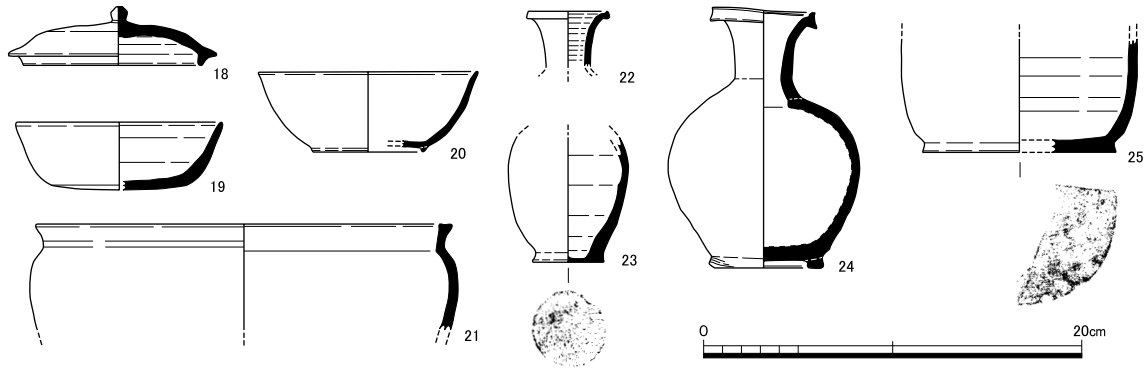


図16 土坑55・60・61出土土器実測図（1：4）

部はやや外反し、端部は丸くおさまる。高台は貼り付けによる。21は須恵器鉢である。土坑55から出土した。内外面ともに回転ナデである。口縁部は外側に屈折している。22～25は須恵器壺である。22は頸部のみ残存している。土坑55から出土した。外面を回転ナデ調整している。口縁部はやや外反し、端部はやや摘み上げている。23は壺の体部である。土坑61から出土した。先述の16と同じ形式のもの。内外面ともに回転ナデ、底部は糸切りである。24は壺である。土坑55から出土した。内外面ともに回転ナデ、貼り付けの輪高台を持ち、高台の底には、乾燥する際置いたと考えられる板の痕跡を確認した。体部は丸味をおび、頸部はやや外反し、口縁端部は摘み上げられている。25は壺の体部・底部である。土坑60から出土した。内外面ともに回転ナデ、平底の底部であり、体部に丸味はなく、垂直に立ち上がる。底部には糸切り痕が確認できる。胎土は密で黄灰色を呈し、焼成は良好である。

埋納遺構53出土遺物（図17・19、図版7 26・27、金1）26は須恵器壺の体部・底部で口縁部は欠損している。調整は内外面ともに回転ナデ、底部は糸切りである。体部は丸味をおび、倒卵形である。27は土師器皿である。調整は体部内外面・口縁部をヨコナデし、外面底部を指オサエしている。口縁端部をやや内側に屈曲する。底部は平坦である。平安京Ⅱ期古段階に属する。金1は

鉄製刀子である。刃部は背が厚く、刃先が薄く、断面は逆三角形をしている。茎には一部、柄

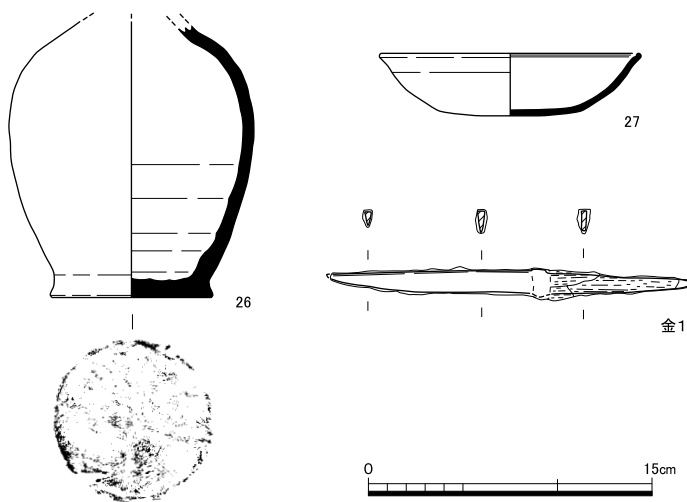


図17 埋納遺構53出土遺物実測図（1：4）

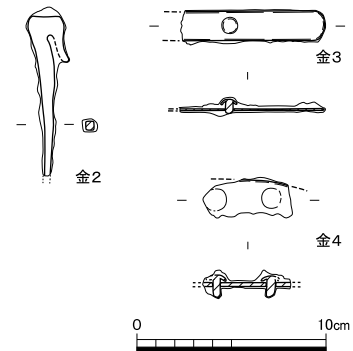


図18 金属製品実測図（1：4）

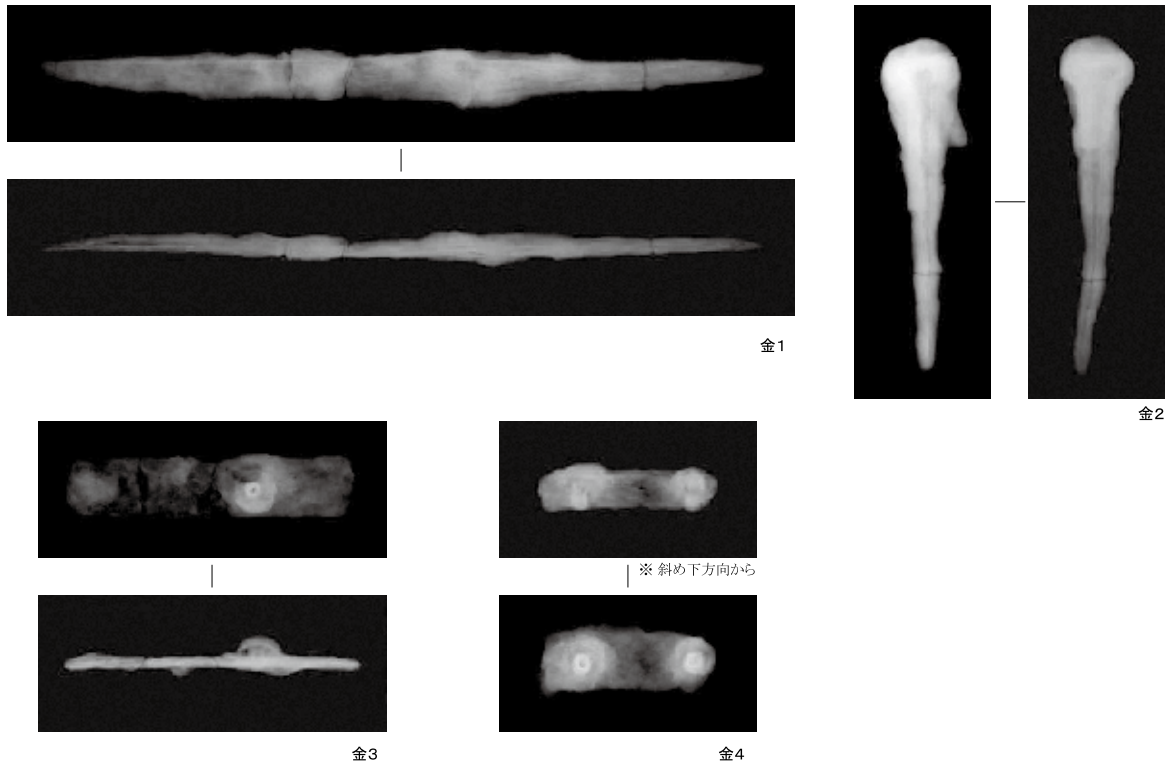


図19 金属製品X線写真（1：2）

の木材が残存する。

金属製品（図18・19、図27 金2～4） 金2は鉄製で釘の可能性はある。上部を折り曲げ、丸く、太い。断面は四角である。金3・4ともに鋳の可能性はある。端部を丸く調整した長方形の薄い板に突起が付く。

（3）瓦類

今回の調査では遺物コンテナ約67箱、1722点の瓦類が出土した。完形のものではなく、全てが破片である。そして一部堅致であるが、多くは軟質であり、磨滅が激しい。出土した瓦の大半は飛鳥時代から奈良時代に属する時期の瓦であった。

以下、平瓦・丸瓦については点数が多く、小破片のため主要なもの限りに提示する。なお、個別詳細については、付表3・4にまとめた。

軒瓦（図20、図版8 瓦1～6） 瓦1～5は軒丸瓦、瓦6は軒平瓦である。瓦1は素弁十葉蓮華文の軒丸瓦である。瓦当裏面中央部が盛り上がり、丸みを帯びる。瓦当部裏面上部に細い接合溝が確認できる。瓦当裏面・側面は丁寧にナデ調整が施される。飛鳥寺出土のいわゆる「花組」の系譜を引く瓦で、この文様の軒丸瓦は北野廃寺の創建瓦と考えられ、北野廃寺瓦窯で生産されていた。飛鳥時代に属する。瓦2は、山田寺垂式の重圏文縁単弁八葉蓮華文軒丸瓦である。瓦当部の裏面・側面は丁寧にナデ調整が施される。周縁は北野廃寺特有の重圏文であり、一点鎖線になっている。奈良時代に属する。瓦3は複弁八葉蓮華文軒丸瓦である。磨滅が著しいが、瓦当裏面は指で強く押さえた痕跡が確認できる。瓦4・5は破片であるが、単弁十二葉蓮華文軒丸瓦である。瓦当部

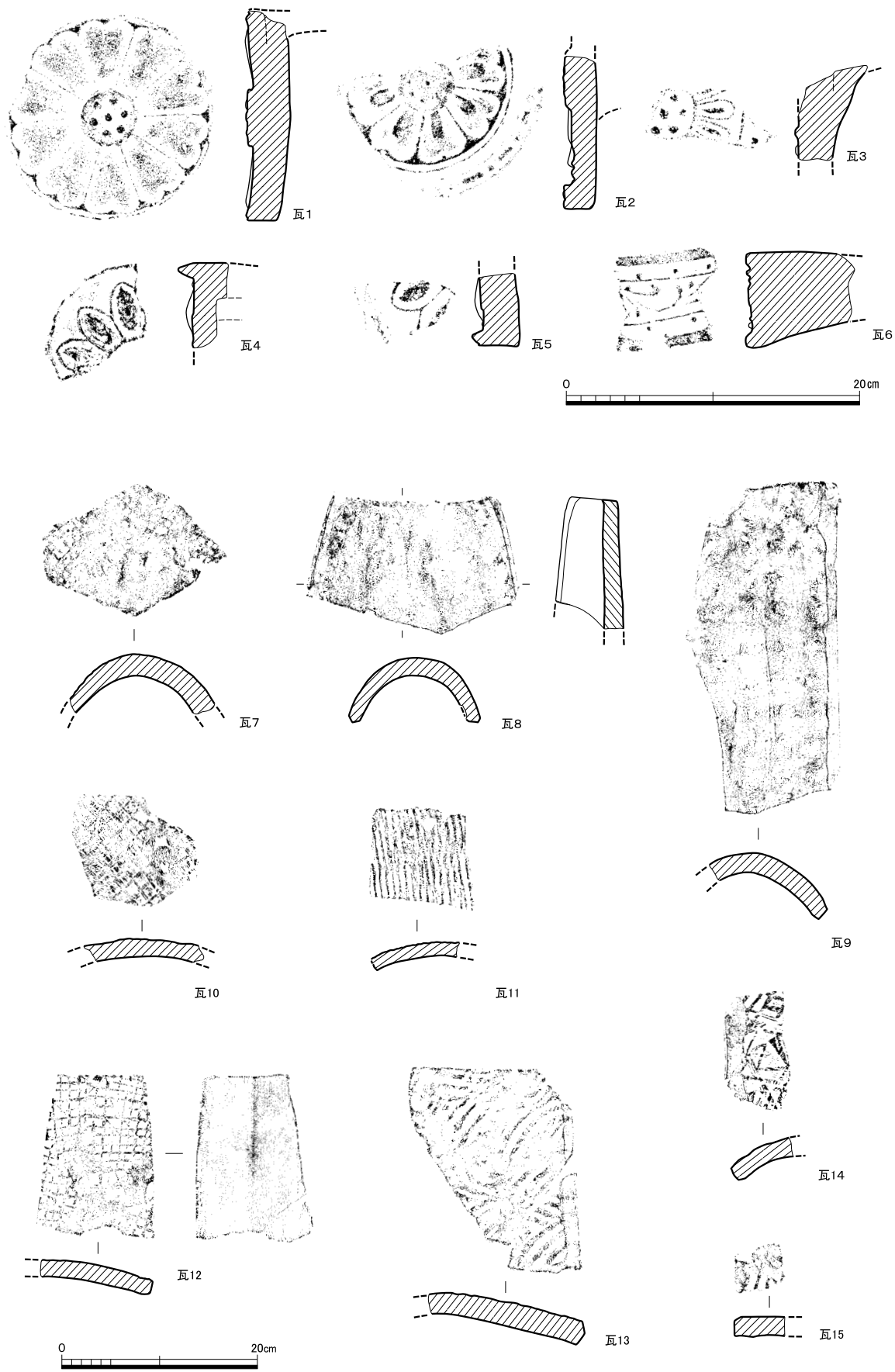


图20 出土瓦類拓影及び実測図1 (1:4、1:6)

の裏面・側面は丁寧にナデ調整が施される。瓦6は均整唐草文軒平瓦である。凹面・凸面共にナデ調整が施される。平城宮6721型式に近いモチーフである。

丸瓦（図20、図版8 瓦7～9） 完形のものはなく、全て破片である。大半が行基式であり、玉縁式のもの破片を数点しか確認できなかった。

瓦7は凸面を格子タタキ、凹面は布目である。凸面はタタキのち、ナデを施すが、タタキ痕は残る。瓦8・9の凹凸面ともに丁寧にナデ調整が施され、側縁部はヘラケズリをしている。

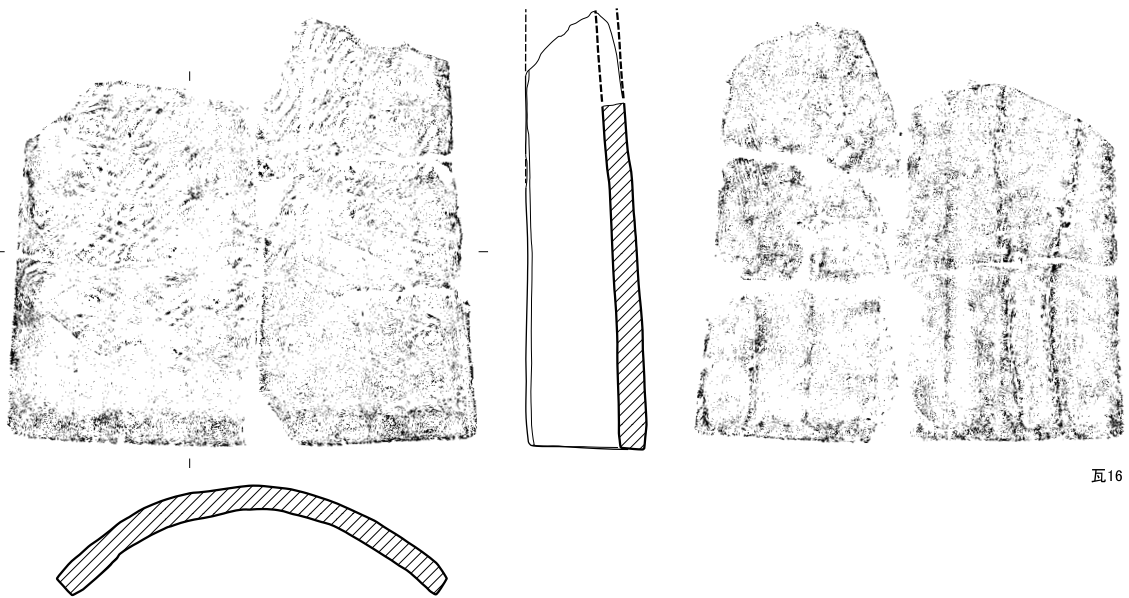
平瓦（図20・21、図版8・9 瓦10～16） 完形のものはなく、全て破片である。今回は調査5（図6）の報告において使用されている平瓦の分類方法に基づいて、分類を行った⁴⁾。これまで確認されている正格子、正格子+斜線、斜格子、平行条、綾杉、縄目、ハケ、幾何学、正格子+縄目、縄目+布目の10種のタタキに加え、正格子+斜格子、大小異なる正格子、平行条+縄目、格子タタキの上から三角形のタタキ、北白川廃寺でも出土している特殊タタキ3種、合計7種のタタキを加えて分類を行った。

瓦10の凸面は縄タタキのち格子タタキ、凹面は布目である。瓦11の凸面は平行条タタキを施し、凹面は布目である。側面には分割破面が確認できた。瓦12の凸面は格子タタキに一部斜線が入るタタキで、凹面は布目である。桶板の横幅は5.5cm以上である。瓦13の凸面は特殊タタキ、凹面は布目である。瓦14の凸面は格子タタキの上から三角形のタタキ、凹面は布目である。桶板の横幅は3.4cm以上である。瓦15の凸面は正格子と長方形の格子が一体となったタタキ、凹面は布目である。瓦16は、凸面を特殊タタキ、凹面は布目である。桶板の横幅は約4.3cmである。瓦の反の状況から、平瓦の製作には直径40cm以上の桶が用いられ、4分割で作成されたと考えられる。瓦17の凸面は正格子タタキ、凹面は布目である。桶板の横幅は約3.5cmである。凸面に正格子タタキが施された平瓦は、本調査において出土した平瓦の内、57%を占める。

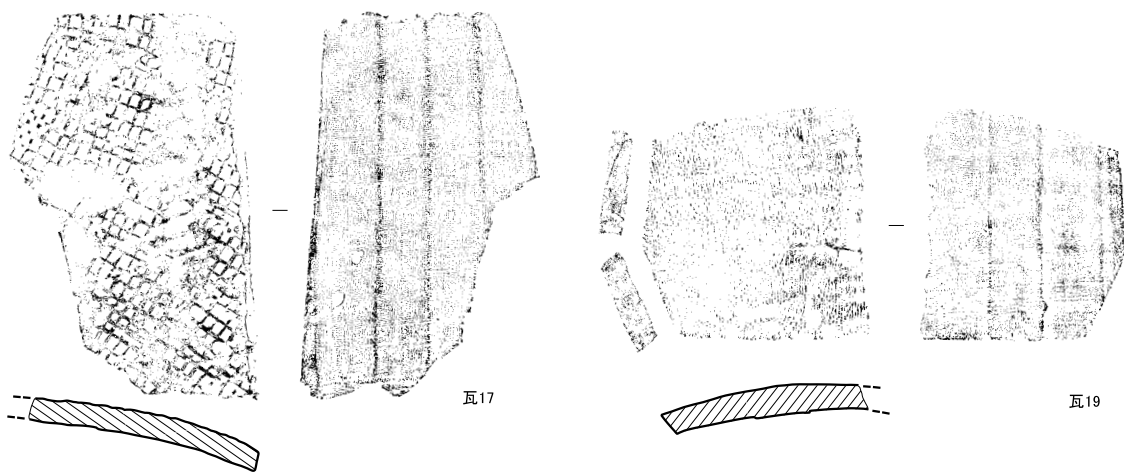
その他の瓦（図21、図版10 瓦18～20） 瓦18は平瓦である。凸面を格子タタキしたのち、ケズリ取っている痕跡を確認した。凹面は布目である。側面及び側縁部は丁寧に削り出し、面取りをされているが、体部はケズリのため、やや薄くなっている。製作技法から軒平瓦の可能性はある。

瓦19は平瓦の広端面の端をカットした瓦である。凸面には縄目タタキ、凹面は布目である。端を焼成前に約30°の角度で切り落としている。その後、丁寧に削られている。

瓦20は窯壁が付着した丸瓦である。側面及び破碎した面にも窯壁が付着していることから、瓦窯の構築材として利用されたものと考えられる。同様の瓦が数点出土している。今回の調査地西側に北野廃寺の瓦を生産していた瓦窯跡（図6 - 調査11）で、用いられた可能性が考えられる⁵⁾。

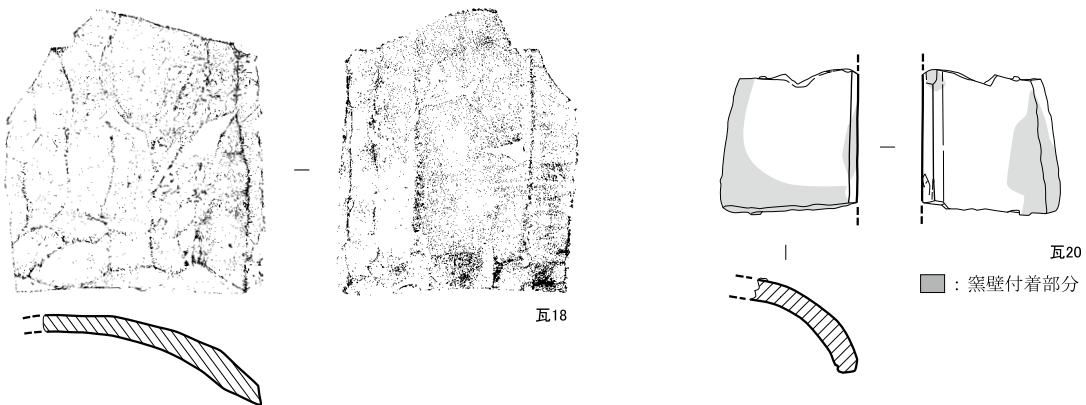


瓦16



瓦17

瓦19



瓦18

瓦20

■：窯壁附着部分



图21 出土瓦類拓影及び実測図2 (1:6)

5. ま と め

今回の調査における主な成果は、平安時代中期の東西溝（溝10）とそれに伴う柵（柵1）、平安時代中期初頭の土取り土坑群、土取り後の整地時の地鎮に伴う埋納遺構53を検出したことである。検出した土取り土坑群の時期は、出土遺物から9世紀後半と考えられる。北野廃寺（常住寺）は元慶8年（884年）に焼失しており⁶⁾、その後、復興・再建していることが史料から窺える⁷⁾。しかし、どの様にして復興・再建されたのかは史料だけでは不明である。今回確認された土取り土坑群は、元慶8年の火災とほぼ同時期であるため、再建の建築資材として利用するための土を採掘した痕と考えられる。史料からは不明であった再建工事の具体的な様子を窺える成果となった。

以下では、今回の調査地が北野廃寺の中でどのような位置に当たるのか、これまでの調査成果を再整理し⁸⁾、若干の考察を述べたい。

(1) 北野廃寺の寺域構成（図22・23）

まず北野廃寺の寺域構成を考えるにあたり、これまで検出された主な遺構を整理する。寺域の外郭を構成すると考えられている溝がいくつか検出されている。北限と考えられる溝には、調査17・25で検出された平安時代の東西溝（北限溝・平安時代）がある。この溝は埋没した年代が平安時代であり、奈良時代以前より存在していたかは不明である。しかし、西側の調査36において奈良時代の東西溝が検出されていることから、奈良時代以前よりこの付近が北限溝であった可能性が考えられる。東限に関係する溝は、2時期確認されている。飛鳥時代から奈良時代では、調査10・15・13・5で検出された一連の南北溝（東限溝・飛鳥時代から奈良時代）があり、平安時代には、その30m程東側の調査13・21・3で検出された南北溝（東限溝・平安時代）がある。南限も2時期確認されている。飛鳥時代から奈良時代では、調査11で検出した東西溝（南限溝・飛鳥時代から奈良時代）が、平安時代には今回の調査で検出した溝10（南限・平安時代）がある。西限溝については、確認ができていない。調査7で奈良・平安時代の掘立柱建物や「鴈室」銘墨書土器が出土しており、寺域はまだ更に西へ広がるとみられる。

次に北野廃寺における地形勾配をみてみたい。図23は境内の南北と東西の断面柱状図である。南北方向の柱状図から地山標高をみると、標高約63.0mの北部、標高約61.0mの中央部、標高約58.5mの南部の3つのエリアに分かれる。また、検出された遺構から各エリアごとに性格が異なっていることが窺える。北部の調査24では、カマドを持つ平安時代の掘立柱建物が確認されていることから、平安時代には厨房施設などが存在し、日常生活に関わる空間であったとみられる。また奈良時代においても掘立柱建物群が検出されており、平安時代以前よりこの地は生活空間として利用されていたとみられる。中央部の調査2・6・23・29では、講堂と推定されている瓦積基壇建物とそれに取り付く回廊状の建物跡が確認されていることから、飛鳥時代から奈良時代は伽藍中樞部であったと考えられる⁹⁾。ただし、平安時代以降もこれらの建物が利用されたのかは不明である。南部の調査11では飛鳥時代から平安時代の瓦窯跡が確認されており、寺院造営に関わる工房

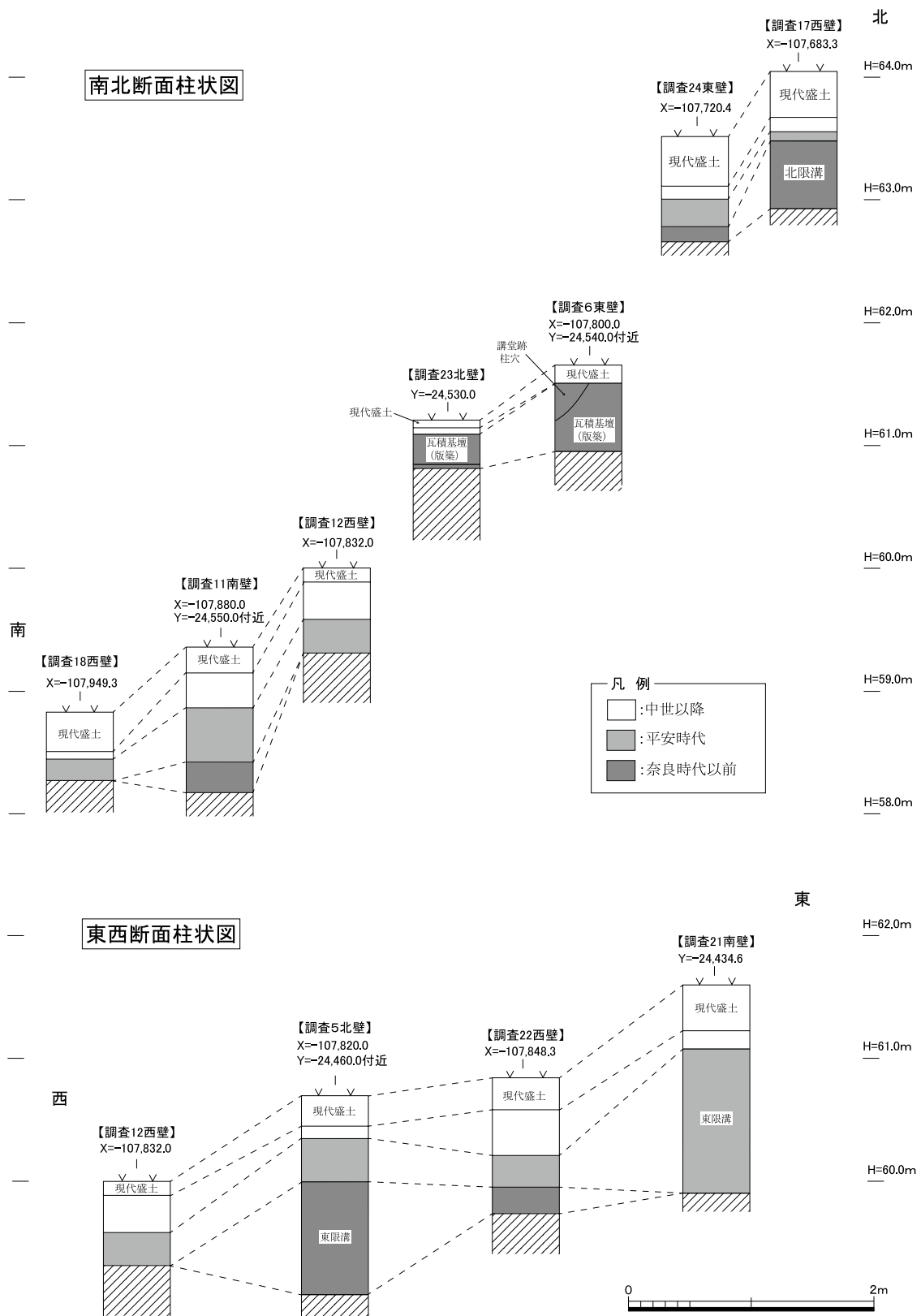


図23 北野廃寺断面柱状図 (1 : 50)

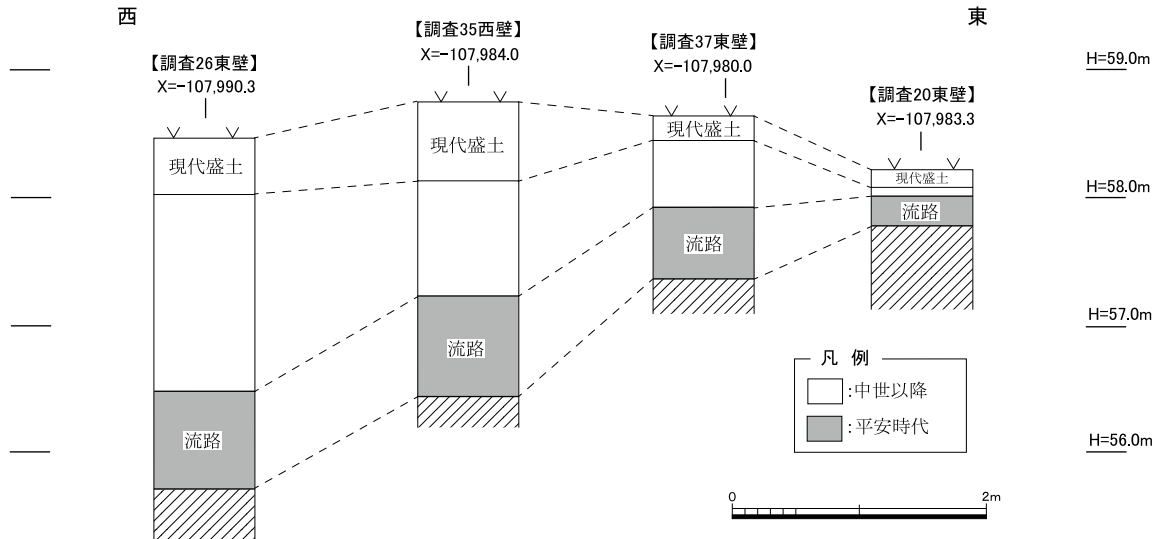


図24 一条大路北大溝断面柱状図（1：50）

域であったことがわかる。また、この西側の調査7では、飛鳥時代の竪穴建物群及び平安時代の掘立柱建物群、平安時代の「鶺鴒室」銘墨書土器が出土していることなどから寺域内であったことがわかる。寺域西限はさらにこの西側となる。また3つのエリアの間、又はその内部を区画する東西方向の溝も確認されている。

（2）北野廃寺と平安京との間（図22・24）

調査20・37・35・26で検出されている東西方向の大溝（以下「一条大路北大溝」とする）は、東から西へ流れ、佐井通付近まで確認されている。紙屋川氾濫時の平安京へ影響を防ぐ為に設けられたものとみられる。なお紙屋川は、京内では西堀川として流路を付けかえられており、度々氾濫を起こしたことが知られている¹⁰⁾。

次に、一条大路北大溝と北野廃寺南限溝との間に存在する遺構について述べる。調査11の北西から南東へ流れる溝（南西溝）は平安時代になると埋められている。この他検出されている遺構は、平安時代前期の井戸と土取り土坑などがあるのみで、溝10（南限・平安時代）より南側は、寺域の外縁部であった可能性が高い。

（3）結語

以上、これまでの調査成果を概観し、遺構との関係を見ることで、北野廃寺内が大きく3つのエリアに分かれ、おおよそ寺域を確認することができた。今回の調査地は寺域の南東部にあたり、元慶8年（884）に常住寺が焼失した際に土取りが行われ、土取り土坑は埋め戻されたのち、整地が行われる。この上面で平安時代中期の北野廃寺の南限とみられる東西方向の溝10や柵1が設けられている。今回の調査で、史料だけでは不明瞭であった火災後の復興状況を確認することができ、大きな成果を得ることができた。

註

- 1) 『京都市遺跡地図台帳【第8版】』京都市文化市民局 2007年
- 2) 平面形が不整形で、底面の高さが一様ではなく凹凸がある土坑を、粘性の強い黄褐色土を採取するための「土取り土坑」とした。
- 3) 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1996年 pp.187 - 261

750頃	840頃	930頃	1010頃	1080~90頃	1180頃	1270頃	1360頃	1440頃	1500頃	1580~90頃	1660頃	1740年代頃	1820年代頃																									
I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X	XI	XII	XIII	XIV																									
古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新

- 4) 堀内明博『北野廃寺 発掘調査報告書』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第7冊 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1987年
- 5) 鈴木久男「北野廃寺瓦窯について」『歴史考古学を考える - 古代瓦の生産と流通 -』帝塚山考古学研究所 1987年 pp.79 - 95
- 6) 常住寺（野寺）は元慶8年（884年）に火災にあっている。
『日本三代実録』元慶8年（884）3月15日の条
- 7) 焼失後、常住寺（野寺）がいつ、どのように復興・再建されたかは、文献史料にその記載がないため不明である。しかし、以下の文献から延長5年（927年）から応安7年（1374年）まで常住寺（野寺）の歴史を確認できることから、元慶8年（884年）に焼失した後も存在していたことがわかる。
・『延喜式』延長5年（927年）
・『本朝世紀』第2巻 天慶元年（938年）
・『師茂記』貞治3年（1364年）、応安7年（1374年）2月の条
- 8) 調査番号は表1・図6と対応している。図22~24を作成するにあたって、調査報告書だけでなく、原資料も参考した。
- 9) 常住寺には史料から講堂・金堂・鐘楼・経蔵・歩廊・中門の存在が窺え、七堂伽藍を備えていたことがわかる。しかし、葛野秦寺時の伽藍については史料による記述がないため不明である。
『日本三代実録』元慶8年（884）3月15日の条
- 10) 南 孝雄「第4章 衰退後の右京」『平安京の地域形成』京都大学学術出版会 2016年 pp.118 - 128

付表1 掲載土器類一覧表

番号	器種	器形	出土遺構	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率 (%)	色調	備考
1	土師器	皿	溝10	11.0	(1.5)	—	10	10YR7/6明黄褐	灯明皿
2	土師器	皿	溝10	11.6	(1.6)	—	10	10YR7/3にぶい黄橙	
3	土師器	皿	溝10	13.2	(1.2)	—	10	10YR7/4にぶい黄橙	灯明皿
4	土師器	皿	溝10	14.4	(1.6)	—	10	7.5YR7/6橙	
5	土師器	皿	溝10	14.6	(2.2)	—	40	7.5YR6/8橙	
6	須恵器	杯身	1区 整地土	10.7	3.7	8.0	60	N5/灰	
7	土師器	皿	1区 整地土	8.0	(1.6)	4.4	50	7.5YR8/6浅黄橙	灯明皿
8	土師器	皿	1区 整地土	8.0	(1.9)	—	40	7.5YR7/4にぶい橙	灯明皿
9	土師器	皿	2区 整地土	8.4	(1.4)	—	10	7.5YR7/6橙	灯明皿
10	灰釉陶器	段皿	2区 整地土	—	(2.6)	8.0	20	2.5YR7/3浅黄	猿投産 窯印の可能性あり
11	緑釉陶器	椀	1区 整地土	—	3.1	6.6	30	素地:10YR6/1褐灰	京都産 トチン痕跡あり
12	緑釉陶器	椀	1区 整地土	19.4	6.7	11.3	40	素地:2.5YR7/2灰黄	猿投産 トチン痕跡あり
13	土師器	甕	1区 整地土	21.6	(5.7)	—	20	7.5YR7/6橙	
14	須恵器	壺	1区 整地土	—	(7.8)	4.0	90	2.5YR5/1黄灰	
15	須恵器	壺	1区 整地土	—	(4.4)	7.8	80	7.5Y5/1灰	
16	須恵器	壺	1区 整地土	—	(7.9)	4.0	80	10YR5/1褐灰	
17	須恵器	壺	1区 整地土	—	(13.0)	10.4	70	外面:10YR3/1黒褐 内面:10YR7/1灰白	
18	須恵器	杯蓋	土坑60	9.1	3.1	—	40	2.5YR6/1黄灰	
19	須恵器	杯身	土坑60	10.7	3.5	6.8	70	7.5YR6/1灰	
20	黒色土器	椀	土坑61	11.4	4.2	5.8	20	外面:7.5Y2/1黒 内面:5YR6/6橙	
21	須恵器	鉢	土坑55	20.6	(5.6)	—	10	7.5Y7/1灰白	京都産
22	須恵器	壺	土坑55	4.2	(3.0)	—	20	N5/灰	
23	須恵器	壺	土坑61	—	(6.6)	4.8	40	N7/灰白	
24	須恵器	壺	土坑55	5.1	4.8	13.8	100	2.5Y6/1黄灰	
25	須恵器	壺	土坑60	—	(6.0)	10.2	20	2.5Y6/1黄灰	
26	土師器	皿	埋納遺構53	13.6	3.3	4.0	100	10YR8/6黄橙	
27	須恵器	壺	埋納遺構53	—	(14.6)	8.6	80	10YR7/8黄橙 10YR7/4にぶい黄橙	

※ () は残存数値

付表2 掲載金属製品一覧表

番号	種類	出土遺構	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	残存率 (%)	備考
金1	刀子	埋納遺構53	(18.8)	1.7	0.1~0.25	90	
金2	釘か	土坑61	(8.8)	0.4~2.1	—	—	
金3	鋌か	2区 整地土	(7.6)	1.8	0.3~(1.0)	—	
金4	鋌か	2区 整地土	(4.7)	1.9	0.3~1.6	—	

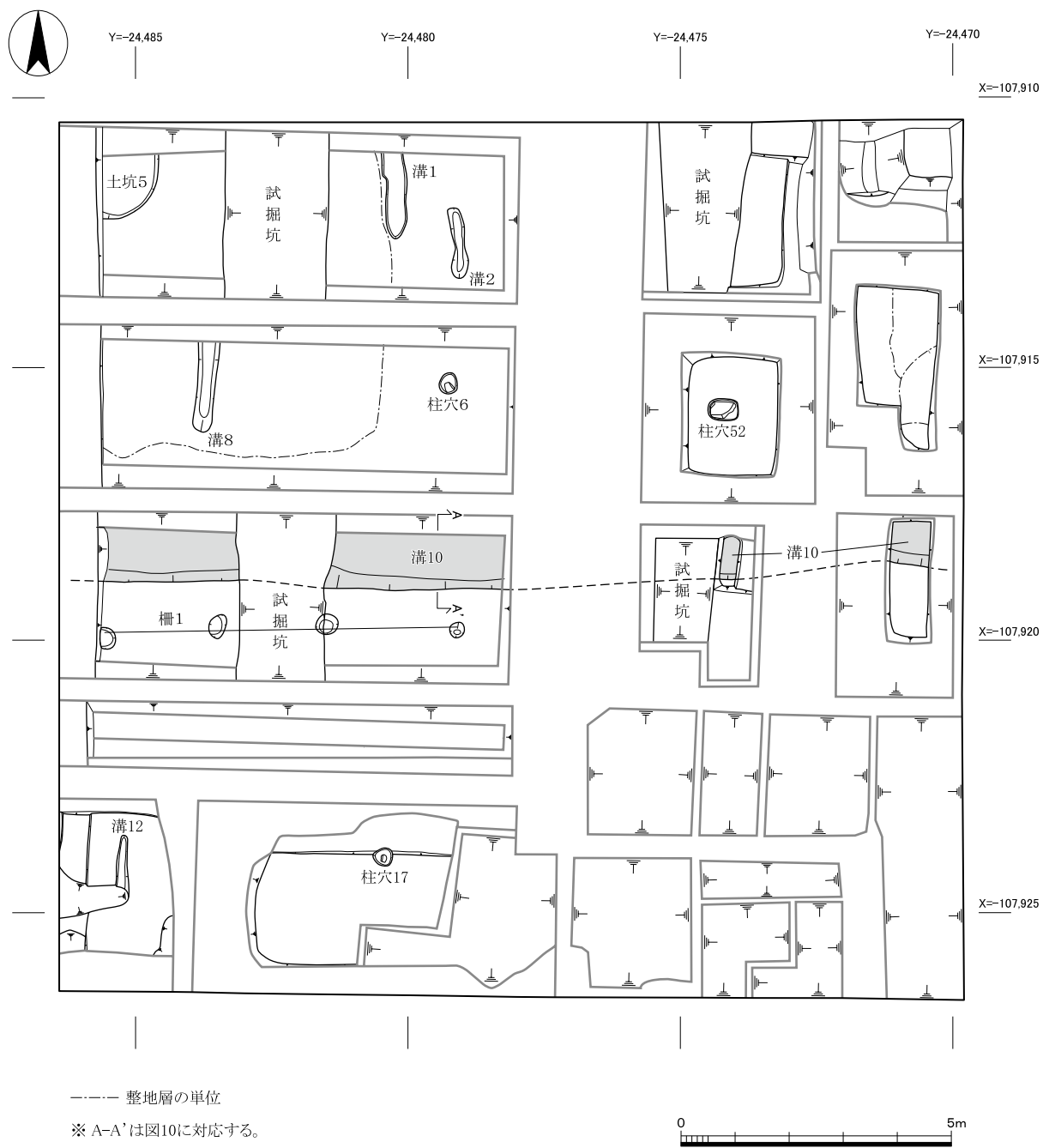
付表3 掲載軒瓦一覧表

番号	種類	出土遺構	瓦当幅 (cm)	瓦当高さ (cm)	厚さ (cm)	色調	焼成	胎土
瓦1	軒丸瓦	柱穴45	14.4	(14.3)	3.1	10YR7/6明黄褐	良好(軟質)	密(φ4mm以下の礫を含む)
瓦2	軒丸瓦	土坑18	(14.0)	(10.4)	2.2	10YR7/3にぶい黄褐	やや不良(軟質)	密(φ2mm程の礫を含む)
瓦3	軒丸瓦	土坑5	(12.0)	(6.5)	5.0	7.5YR7/6橙	やや不良(軟質)	密(φ2mm程の礫を含む)
瓦4	軒丸瓦	1区 整地土	(8.5)	(5.7)	3.4	10YR4/1褐灰	良好(軟質)	密(φ2mm程の礫を含む)
瓦5	軒丸瓦	1区 整地土	(7.0)	(5.0)	3.0	10YR3/1黒褐	良好(軟質)	密(φ1mm程の礫を含む)
瓦6	軒平瓦	土坑5	(8.6)	(6.2)	4.0	10YR7/1灰色	良好(軟質)	密(φ3mm程の礫を含む)

付表4 掲載丸瓦・平瓦・その他の瓦一覧表

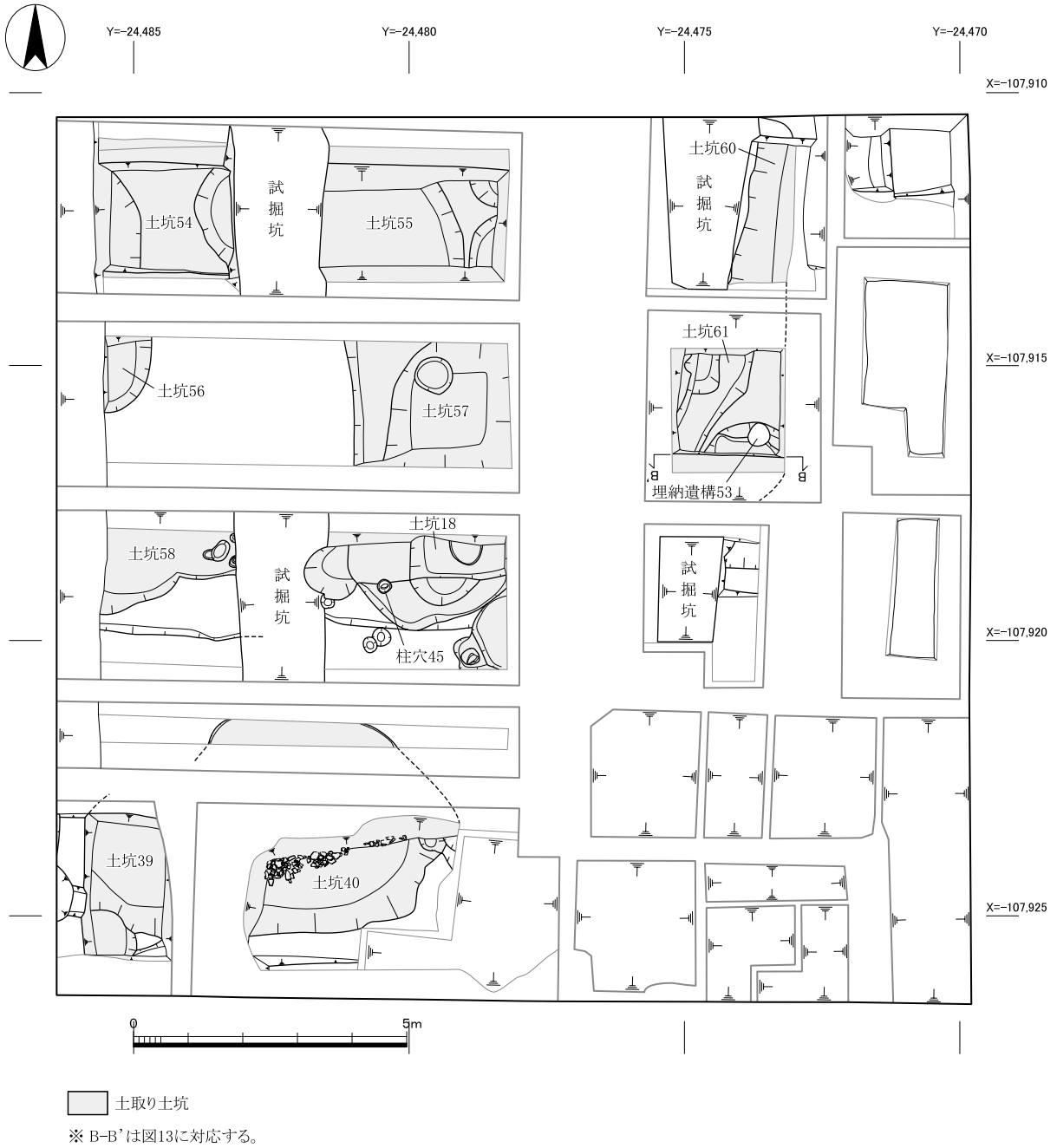
番号	種類	出土遺構	全長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	色調	焼成	胎土
瓦7	丸瓦(行基式)	1区 整地土	(13.6)	(14.6)	2.3	7.5YR8/2灰白	やや不良(軟質)	密(φ3mm程の礫を含む)
瓦8	丸瓦(行基式)	土坑5	(13.3)	(14.2)	2.0	N5/灰	良好(硬質)	密(φ1mm程の礫を含む)
瓦9	丸瓦(行基式)	土坑5	(33.5)	(12.0)	2.0	N5/灰	良好(硬質)	密(φ1mm程の礫を含む)
瓦10	平瓦	土坑54	(13.5)	(11.9)	2.0	10YR7/1灰白	良好(やや硬質)	密(φ2mm程の礫を含む)
瓦11	平瓦	1区 整地土	(9.8)	(10.6)	1.6	10YR6/2灰黄褐	良好(硬質)	密(φ3mm程の礫を含む)
瓦12	平瓦	1区 整地土	(16.6)	(11.0)	2.2	2.5YR8/4淡黄	良好(硬質)	密(φ1mm程の礫を含む)
瓦13	平瓦	土坑39	(20.5)	(15.5)	2.5	5YR7/8橙	良好(硬質)	密(φ1mm程の礫を含む)
瓦14	平瓦	土坑18	(12.9)	(6.9)	2.0	10YR6/1褐灰	良好(やや硬質)	密(φ1mm程の礫を含む)
瓦15	平瓦	土坑54	(6.0)	(5.5)	2.0	10YR8/6黄橙	やや不良(軟質)	密(φ3mm程の礫を含む)
瓦16	平瓦	土坑40	(30.4)	29.0	2.3	5YR6/6橙	良好(硬質)	密(φ2mm程の礫を含む)
瓦17	平瓦	土坑55	(30.0)	(18.0)	2.0	7.5YR7/3にぶい橙	良好(硬質)	密(φ2mm程の礫を含む)
瓦18	平瓦	1区 整地土	(22.1)	(17.3)	2.5	7.5YR5/1灰	良好(硬質)	密(φ1mm程の礫を含む)
瓦19	道具瓦	土坑54	(18.5)	(17.2)	2.3	N4/灰色	良好(硬質)	密(φ1mm程の礫を含む)
瓦20	丸瓦	溝10	(9.8)	(10.2)	1.8	5YR5/6明赤褐	良好(硬質)	密(φ1mm程の礫を含む)

圖 版



第1面平面図 (1 : 120)

図版2
遺構



第2面平面図 (1 : 120)



1 調査区西半（1区）第1面全景（北西から）



2 調査区東半（2区）第1面全景（北西から）



1 調査区西半（1区）第2面全景（東から）



2 調査区東半（2区）第2面全景（北西から）



1 溝10完掘状況（東から）



2 土坑40 瓦出土状況（東南東から）



3 柱穴45 瓦出土状況（北西から）



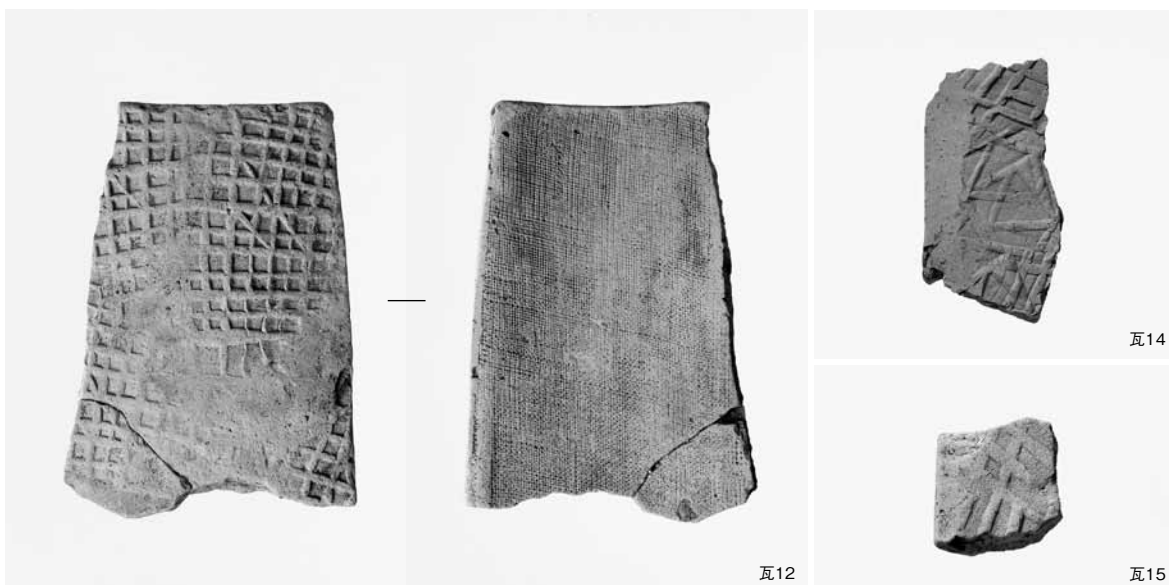
4 埋納遺構53 遺物出土状況（北から）

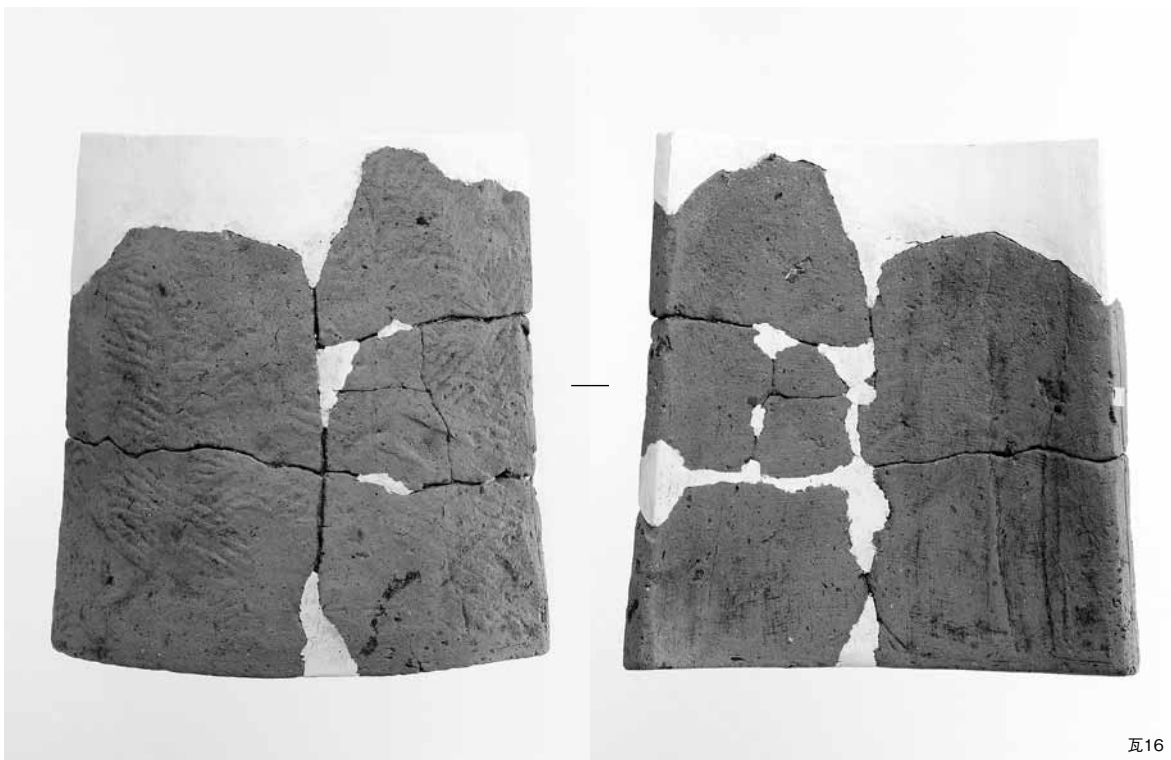


图版 8
遺物

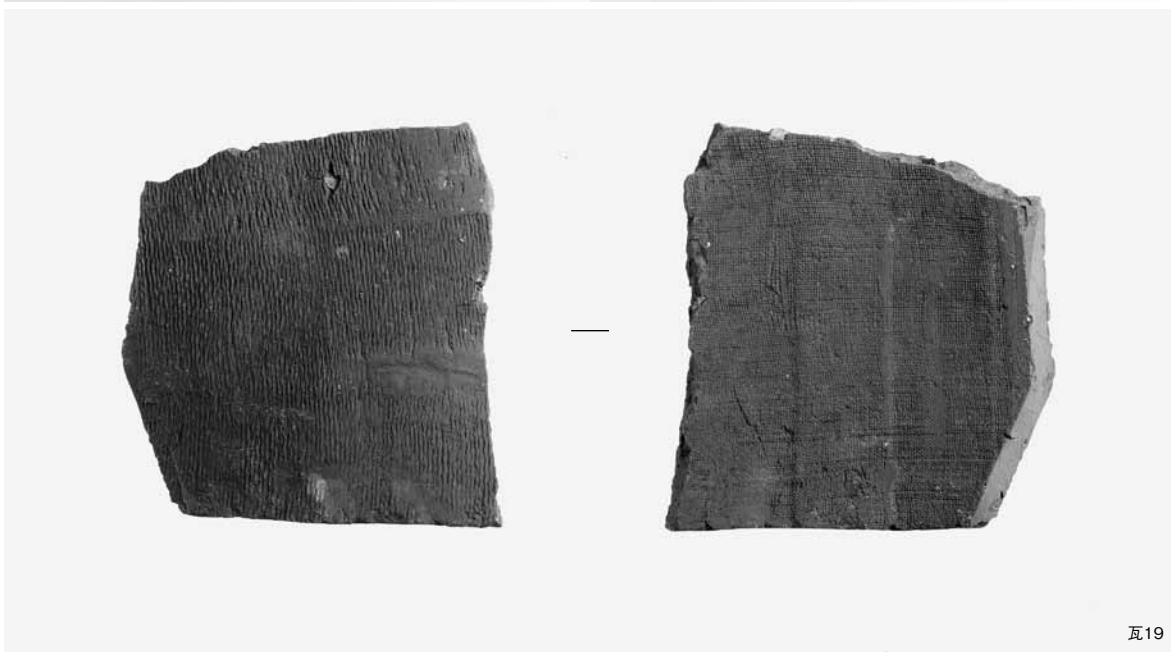


瓦類 1





瓦16



瓦19



瓦20

報 告 書 抄 録

ふりがな	きたのはいじ・きたのいせき							
書名	北野廃寺・北野遺跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2018-8							
編著者名	岡田麻衣子							
編集機関	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2019年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
きたのはいじ 北野廃寺 きたのいせき 北野遺跡	きょうとしきたく 京都市北区 きたのしもはくぼいちょう 北野下白梅町 ばんち 56番地	26100	160 161	35度 01分 37秒	135度 43分 54秒	2018年9月 25日～2018 年11月7日	約195㎡	建物新築 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
北野廃寺	寺院跡	弥生時代		弥生土器		常住寺(野寺)が884年に焼失後の復興作業を示す平安時代中期初頭の土取り土坑と平安時代中期の東西溝を検出した。		
北野遺跡	集落跡	飛鳥時代 ～奈良時代		須恵器、瓦類				
		平安時代中期 初頭	土取り土坑、柱穴、 柵、埋納遺構	土師器、須恵器、黒色 土器、緑釉陶器、灰釉 陶器、金属製品、瓦類				
		平安時代中期	土坑、柱穴、溝	土師器、瓦類				
		中世	溝					

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2018-8

北野廃寺・北野遺跡

発行日 2019年3月31日

編集
発行 公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 TEL 075-256-0961